

第二編

ビルマ戦線従軍の記

一、大東亞戦争の概要

大東亞戦争は、戦後一般に「第二次世界大戦」あるいは「太平洋戦争」と呼ばれているが、当時は開戦のころから「大東亞戦争」と称されていた。

昭和六年、我が国が中国東北部の満州に進出したのに対し、米国英国を中心とした西欧の国々は、国際連盟の力を以て無条件撤退を求め、中国もまた激しく反抗して来た。東南アジアのほとんどの地域が、米英仏オランダの植民地となっていた当時、無資源で工業化の進んでいなかった日本が活路を満州に求めた事は、当時としては止むを得ない事であった。八年三月、ついに国際連盟を脱退し国際的に孤立した。続いて昭和十二年、日支事変勃発、早期解決の願いも空しく戦線は支那全土に拡大し、解決の目途もたたなくなつた。

米英両国は、中国の蒋介石軍を積極的に支援する一方、経済交易面で、いわゆるABC D包囲陣なるものを結成し、我が国への輸出を禁止したため、我が国は窮地に立たされることになった。(A II アメリカ B II ブリテン・英国 C II チャイナ・支那 D II ダッチ アイランド・オランダ) 我が国は、満州を手離す訳にもいかず、経済封鎖の中で、石油、ゴム、鉄鋼石等の原材料も入手できなくなつたので、東南アジア一帯に広がる英米仏オラ

ンダの植民地を解放し、日本を含めた「大東亜共栄圏」を作ることとして、昭和十六年十二月、米、英国に対し宣戦を布告し、これ等植民地の占領に着手した。

戦略の基本は、これ等の国々が、対ドイツ戦で苦戦している間に、彼等の植民地であるフィリピン・仏領インド支那・ジャワ・マライ・シンガポール・ビルマ等を制圧し、その軍隊を駆逐すれば、多分彼等は降伏して東亜共栄圏の確立ができるだろうというものである。昭和十六年から十八年にかけて、初動の戦闘は予想通り、我が軍の大勝利のうちにこれ等の地域を占領することができた。

しかし、かつての日露戦争時の奉天戦のように、延び切った戦線と弾丸や食糧を使い果たした時点で、敵が具合よく降伏してくれなかった。米英は、ドイツ戦線での有利さの中で着々と反攻作戦の準備を進め、十八年以降総攻撃に出たのである。優勢な航空機と潜水艦は、我が方の輸送路を寸断し、圧倒的な質量の戦車や火砲は、我が軍の全面に襲いかかった。弾薬も食糧もなく、支援補給の部隊も到着しない前線は、まさに屋上ではしごを外されての苦闘である。百に一つの勝ち目も無いのは理の当然である。

かくして、前線は破れ放題、国内は疲弊と荒廃の極、その上、原子爆弾とあつては敗戦も致し方ないことであつた。次に大東亜戦の開戦及び敗戦の事情を端的に表した詔書を掲げて参考とする。(難解な漢字は私がルビを付したり、仮名に改めたり同義語に置きかえ

て示す。）

○ 米国及ヒ英国ニ対スル宣戦ノ詔書 昭和十六年十二月八日

天佑ヲ保有シ万世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝国天皇ハ 昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス朕茲ニ米国及ヒ英国ニ対シ戦ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戦ニ従事シ朕カ百僚有司ハ励精職務ヲ奉公シ朕カ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ尽シ億兆一心国家ノ総力ヲ挙ケテ征戦ノ目的ヲ達成スルニ違算ナカラムコトヲ期セヨ

抑々東亜ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハひ頭（大いなる）ナル皇祖考ヒ承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々惜カサル所而シテ列国トノ交誼ヲ篤クシ万邦共榮ノ樂ヲ楷ニスルハ之亦帝国カ常ニ国交ノ要義ト為ス所ナリ

今ヤ不幸ニシテ米・英兩國トきん端（あらそい）ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府先ニ帝国ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亜ノ平和ヲかく乱シ遂ニ帝国ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有余ヲ経タリ幸ニ国民政府更新スルアリ帝国ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提携スルニ至レルモ重慶ニ残存スル政権ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟弟尚未タ垣ニ相せめぐヲ改メス米・英兩國ハ残存政権ヲ支援シテ東亜ノ禍乱ヲ助長シ平和ノ美名ニ隠レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝国ノ周

辺ニ於テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和の通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ亘リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯クノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ関スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ帰シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ為けつ然起ッテ一切ノ障害ヲ破碎スルノ外ナキナリ

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

○終戦ノ詔書 昭和二十年八月十四日

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾爾臣民ニ告ク

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ抑々帝國臣民ノ康寧ヲ図リ万邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々惜カサル所先ニ米英二國ニ宣戦セル所以モ亦夷ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ

他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス然ルニ已ニ四歳ヲ閱シ朕カ陸
海將兵ノ勇戰朕カ百僚有司ノ勵精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ尽セルニ拘ラス戦局必
スシモ好転セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻リ
ニ無コヲ殺傷シ慘害ノ及フ所真ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戦ヲ繼續セムカ終ニ我カ
民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯クノ如クムハ朕何ヲ以
テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ応セ
シムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝國臣
民ニシテ戰陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ倒レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内為ニ裂ク且
戰傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深く軫念スル所ナリ惟フニ
今後帝國ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ
朕ハ時運ノ赴ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス
朕ハ茲ニ國体ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ
情ノ激スル所濫ニ事端ヲ繁クシ或ハ同胞排さい互ニ時局ヲ乱リ為ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世
界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク拳國一家子孫相伝ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重ク
シテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ厚クシ志操ヲ固クシ誓テ國体ノ精華ヲ發

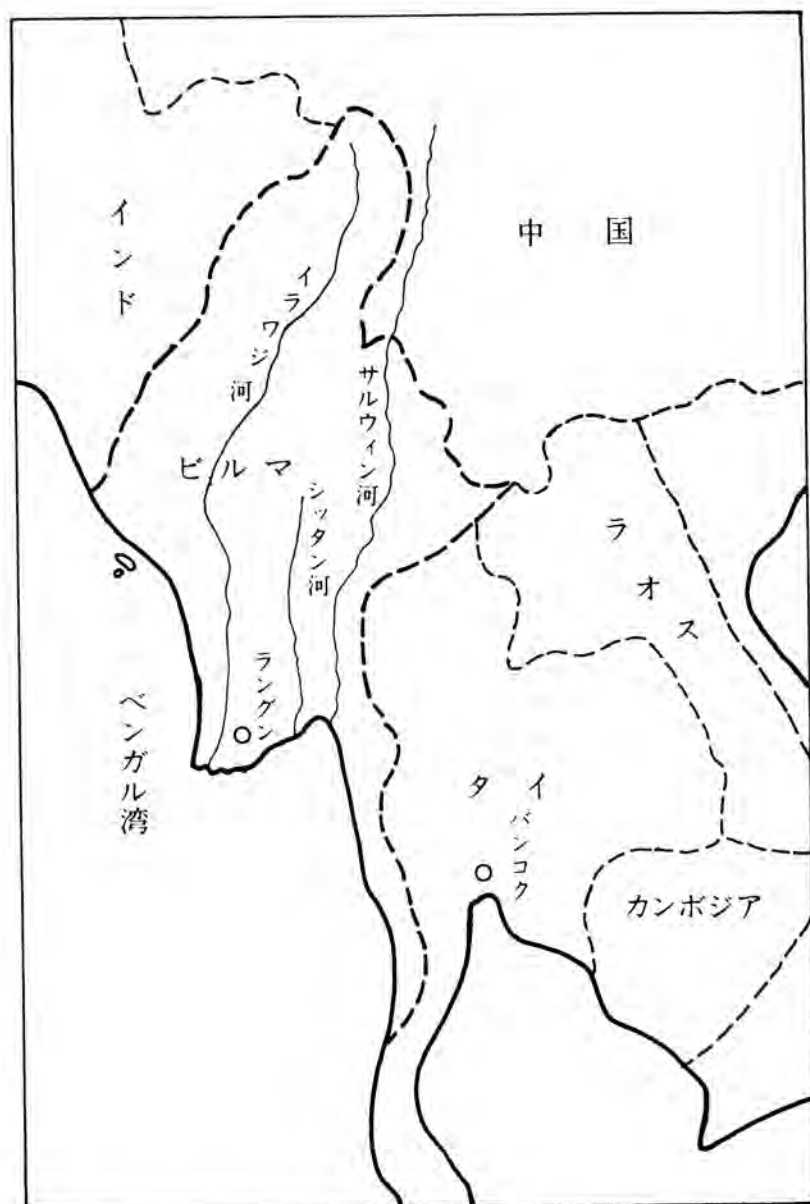
揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトラ期スヘシ爾臣民其レ克³朕力意ヲ体セヨ

二、ビルマ戦線の概要

(1) ビルマの地形氣候

ビルマは現在国名を「ミャンマー」と改めている。そして首都のラングンも「ヤンゴン」としている。日本の南西四千五百キロに在つて、日本との経度差は四十度（標準時間差二時間三十分）である。ビルマの国は、南北二千キロ、東西千キロのほぼ菱形で、面積は六十八万平方キロ、人口は四千万人、面積は我が国の約二倍、人口は三分の一に当る。南西部と南部はベンガル湾にのぞみ、北西部はインド、北部は中国、東部はタイと国境を接している。

隣国との国境は何れも山岳地帯で、特にインドと中国との国境は二千メートルにも及ぶ険しい山々が続いている。国内は北から南にむかつて、アラカン、シヤンの急峻^{しゅん}な山脈が走り、中央部にはペグー山地がある。可耕地は、全面積の十五パーセント位で、イラワジとシッタンの河口付近に拡がつている。



人口約四千万人の、その七割がビルマ人で、その他山岳地帯には五十もの少数民族がいる。ビルマ人は、体形や顔は日本人と変わりが無く、性質はおとなしくて、一般に親日的感情が強い。

ビルマの緯度は、台湾やフィリピンと同じ熱帯地方に在るが、北部山岳地帯は冷涼で冬期桜が咲くほどである。南部は印度洋のモンスーンの影響を直接に受け、乾季と雨季の区別が判然としている。すなわち、六月から十月までが雨季で、毎月の降水量は五百ミリを越え、特に最盛期の七、八、九月は連日連夜篠^{しよ}つく雨が降り続く。逆に十二月から四月までは乾季で、それこそこの間には雨は一滴も降らず、雨季の湿田も全てコンクリート道のように固まってしまう。南部の海岸地方では三月四月が最も暑く、戸外では四十度近くになるが、空気が乾燥しているので日陰での壮快感は格別である。

(2) ビルマ戦線の概要

昭和十七年二月、シンガポールを占領した日本軍は、その余勢を駆^かつて三月八日にはビルマの首都ラングンを占領し、間もなくビルマ全土から英軍を駆逐し、北部の中国々境の山岳地帯に進出して、印度から中国の重慶に通ずる援蔣ルート（英米軍から中国蔣介石軍に軍需支援物資を送るルート）の切断を試みた。しかし、何分の僻^{へき}地で急峻な山岳地帯で

あり、更に米軍式の装備を持った中国軍の抵抗も激しく、戦局は一進一退の状況であった。

昭和十八年、態勢を立て直した米軍は、優勢な空軍力海軍力支援のもと太平洋各地の拠点を猛攻して来た。このため、日本の守備隊は各地で玉砕し撃破され、戦況は月を経るに従って悪化の一途を辿った。そこで軍や国民の沈滞する士気を高揚するため計画されたのが、ビルマにおける「インパール作戦」である。昭和十九年三月、牟田口中将の率いる第十五軍（三〇師団基幹、約十万人）を以て峻険アラカン山脈を越え、隣国インドの援蔣ルート^{しゅんけん}の基地インパールを攻略しようとするものである。この作戦も補給等は全く考えない無謀な作戦計画であった。完全な敵の制空権のもと、将兵は徒歩で山を越え、谷を渡り、敵陣の前に到着した時には、既に疲労困憊^{こんばい}食糧弾薬もなく加えて雨季に遭遇し、ついに算を乱しての退却となった。ビルマに帰還し得た者は僅かに一万五千、文字通り無謀慘怛^{さんたん}たる作戦であった。

インパール作戦に勝利した英軍は着々と準備を進め、十九年末から、ビルマ中部に空挺部隊を降下させると共に、山岳部および西部海岸より一斉に攻勢に転じて来た。北部では戦軍の大部隊を先頭に、多量の車輛部隊を以て南進を開始、我が軍の防衛線も航空機や戦車の近代装備の前には如何ともし難く、ついに二十年四月には、ビルマ方面軍も首都のラングンを放棄、タイとの国境へと撤退を余儀なくされた。

このため、西部海岸で、上陸して来た敵を相手として戦っていた第二十八軍（私の所属する軍団）は、アラカン山脈の西部に孤立することになった。方面軍は、ビルマ戦線の立て直しのため、二十八軍に対し「前面の敵との交戦を放棄し、後方の敵中を突破してタイ国境まで帰来するよう」命令を発した。この敵中突破作戦を「邁作戦」と呼び、折から雨季の最盛期として戦闘による犠牲者も相当多かったが、それにもまして、栄養失調と雨に打たれての泥濘（でいねい）の行軍のため体力を消耗し尽くし、さらにマラリアや赤痢に罹（か）つて命を落とす者数知れず、また、雨季で増水した河（シッタタン河）を筏（いかだ）で渡る際、不運にも濁流に呑まれた者も数万にのぼるといふ悲惨極まりない作戦であった。

皮肉なことに、第二十八軍が莫大な損害を出してようやく邁作戦を終了しようとした丁度（ちょうど）その時点で、我が国の全面降伏、戦争の終了が伝えられたことである。昭和二十年初頭から半年後の終戦までに、わが師団の損耗は、生存者が僅か三千人に対して、戦死者五千人生死不明者五千人という苛酷なものであった。これを私の所属する百二十一連隊で見ると、戦闘初期の兵力三千人に対し、戦没者はその七割に相当する二千人にも達している。

三、ビルマ到着まで

(1) 動員の発令

昭和十八年二月十七日、姫路の五十四師団に対し動員準備が示達された。動員というのは、いつでも戦闘配備につけるよう、兵員、馬匹、兵器を完備した部隊編成をすることである。五十四師団には、附記の部隊の組織の項でもとり上げた通り、歩兵連隊として姫路、岡山、鳥取の三連隊があった。

たまたま、教育訓練のため兵庫県青野が原演習場に来ていた私たちの教育隊は、直ちに訓練を中止して鳥取連隊に帰り、預かっていた候補生を朝鮮の原隊に復帰させた。それから約一か月間、隊内は召集によって入隊してくる將兵の受入れや、諸兵器の受領整備等に追われる毎日であった。

三月二十五日、いよいよ動員が下令され、鳥取、兵庫の全県下から数千人の將兵が召集によって集まって来た。彼等の年令は二十五才から三十才で、既に現役兵として支那において戦闘経験を積んだ者で、除隊して半年から三年位も家庭にいた者たちである。

三月二十七日動員完了、連隊の総兵員は、二、九〇五名、馬匹四〇〇頭。私の官氏名は、

「歩兵第百二十一連隊第三大隊第十一中隊第一小隊長、陸軍少尉小松正雄」である。中隊の中に第一小隊から第三小隊まであり、三人の小隊長の中で先任者となった。小隊の中は第一分隊から第四分隊まであり、各分隊は十二、三名で小隊の総数は五十名である。

編成を完結した連隊は、四月三日曇り空の練兵場に整列して「出陣式」を実施した。まず、兵員馬匹の軍装検査、続いて東方（宮城）遙拝、ラッパ「足曳き」の曲吹奏により軍旗奉戴敬礼、長沢連隊長の軍人勅諭奉読、連隊長の「弾丸に死すとも病に死すな。軍旗の光を輝かせ」という主旨の訓示が行われた。出陣式を終えた部隊は、近くの国幣中社の「宇部神社」に参拝し、武運の長久と戦勝の祈願を行った。

(2) 最後の手紙

動員により、先任の小隊長になった時は、二十二才と六か月、精神的にもまた軍務経験の上からも未熟な身である。これからは、小隊員五十名の命を預かって弾丸雨注の中で任務を遂行していかねばならない。兵たちの年輩は全員が私より二才から五才位も年上で、しかも戦場経験の豊かな者が多い。更には結婚して家庭を持った者が、そのほとんどである。若輩の身で、これら経験豊かな年長の兵を指揮し統御する苦勞は並大抵ではない。日ごろの言動には細心の注意を払い、彼等の信頼を得、尊敬を集めるべく涙ぐましい努力を

重ねた。軍の派遣先は一切秘密でわからないが、支給された軍装が夏物であったことから、南方行きは間違いないとの大方の見方であった。行先が南方であるなら、生還の可能性も極めて低いと考えなければならない。

出征にあたって、当時の心境と決意のほどを次のような手紙にして、家郷の父と幼児期から可愛がつてくれた母の兄である伯父に宛てて送った。何れも和紙の巻紙に、墨でいねいにしたためたものである。

今茲に軍旗の下、小隊長として出動を被命、日比の願此に至り、男子の本懐洵に感激に不堪候。二十四年之歲月特別に御心配を戴きし鴻恩に報ず可きの秋、亦五十余の尊き人命を預る身、軽率は不被許候、総てを天に捧げ生を求めず死も怖れず誠心誠意任務に邁進可致候。最後に 父上母上様 兄上の御健康を祈り、淑子の多幸と邦夫治雄の活躍を庶ひ敦子の元氣ならん事祈上候

昭和十八年四月

正雄

父上様

御一同様

(一八、四、六、着信)

なお、伯父宛てには、手紙とともに爪髪及び遺言書を同封した手紙を送っている。

年来の希み茲にかない愈々榮ある出立の日を迎え候

先日は悪天候御多用中に不閑遠路来鳥被下御餞まで賜り有難く御礼申上候

幼時より並々ならざる御世話に相成候 水車小屋、風呂槽の事も懐しく想起被致候

軍籍に奉ずる身十二分の覚悟は致居候 祖母様を始め御一統様之御健康と御多幸祈上候

先は出発に当り御礼まで如斯候

敬白

追而 別封にて爪髪、書状壺通送置候 凱旋の折まで内密に保存致被下度願上候

(3) 鳥取出発

四月四日は最後の面会日であった。朝からの雨の中、隊内は別れを惜しむ家族連れで大混雑であった。翌五日、いよいよ兵營出發である。軍旗を先頭に各隊建制の順に従って、歩武堂々と鳥取駅へ向かう。並木の桜が漸くほころび初めた沿道で、市民や家族が人垣を作り日の丸の小旗を振って、万歳々と熱狂する中を行進する。隊列の中から息子の姿を見つけ出した老婆が、隊列の横を小走りで追う姿、行進中に家族を見つけ、そつと握手す

る兵、送る側も送られる側も生別訣別の思いを深くする。

鳥取より関金まで列車輸送、それから行軍によつて岡山県境の蒜山ひるせんしょうしゃ廠舎に入る。連隊はここで、各組織の団結強化を目的とした第一次訓練を行なう。ここ蒜山は高冷地のため時折り雪が降りしきり、夏軍装の兵等を苦しめる。四月十四日、内地出発の命令が下り、行軍によつて倉吉市まで下り、内地最後の夜を、民宿で過ごす。私たち十一中隊の四名の将校は、小川という造り酒屋に宿舎を割り当てられ、夜はしほり立ての原酒なるものを頂戴ちようだいし、その豊醇ほうじゆんな香りと家族の温かいおもてなしは、ビルマ戦線においても常に懐しい思い出となった。

翌々日倉吉出発、上井駅から乗車した列車は伯備線、山陽線を通つて門司港に到着、下車して直ちに四隻の輸送船に分乗する。途中、伊万里湾に寄つて他の八隻と船団を組み、駆逐艦に護衛されて一路西進。玄界灘は、敵潜水艦の攻撃を避けるためジグザグの前進、速度は普通の二倍はかかるほどの、のろのろ前進である。

二十三日夕刻、初年兵当時の想い出も深い上海しゃんはいの鉄道栈橋に接岸、上陸する。上海では、次期輸送命令が出るまでの約三月を郊外の江湾鎮キヤンワンの東兵舎で過ごすことになった。兵舎は広い麦畑の中にあつて、付近には敷島公園やゴルフ場、競馬場もあつた。また、ここは上海事変当時の激戦場であつたので、トーチカの残骸ざんがいが随所に見られた。毎日ゴルフ場や

競馬場を使って訓練に励んだが、時には行軍を兼ねて近くの大場鎮や廟江鎮の古戦場をも尋ねた。

休日には、中隊長の案内でよく上海のフランス租界やバンドの見学をした。最近テレビでよく見られるガーデンブリッジ協の上海公園は、当時パブリックガーデンと呼ばれ、フランスが管理していたが、公園入口に「支那人および犬入るべからず」の立札があった。上海における中国人の立場を最も端的に表現したものとして印象深かった。またある時には足をのばして、蘇州見物をしたこともある。「月落ち烏ないて霜天に満つ」の詩で名高い寒山寺の白壁に、燃料にする牛糞が一面に張りつけられていたのは驚きであった。

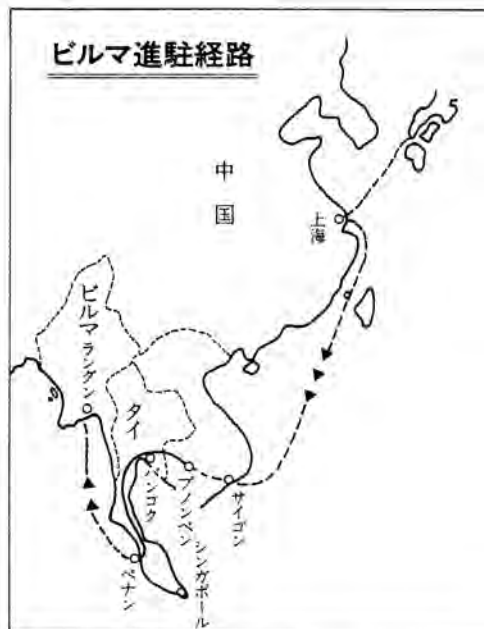
上海駐留の三か月は、本大戦従軍中、最もゆとりのある楽しい期間であった。

(4) ビルマ進駐

昭和十八年七月十九日、いよいよ上海を出発して南方に向かうことになった。私たちの第三大隊が乗った船は、雪山丸といって外国船を接收して輸送船に改装したものである。船室の中は、例の如く天井の低い蚕棚方式のものである。途中で台湾の澎湖島に寄って、船団の組み替えと、折からの台風の避難をした。

澎湖島からは、二隻の駆逐艦に護られて、十数隻が船団を組んでの南航である。東支那

ビルマ進駐経路



れ、胃液まで吐き出してもまだ嘔吐おうとが止まらない。三度三度の冬瓜とうがんの味噌汁など見るのもいやである。船の乗組員に言わせると、この方が潜水艦の攻撃を受けにくくてよい海況だという。

台風之余波が漸く収まりかけた七月二十九日、船団は南国の太陽にまぶしく照りつけられたサイゴン（現ホーチミン）の湾口に到着する。翌三十日、上陸して初めて南国の土を踏む。一度は来てみたいと思っていた南国について来たのだという想いで一杯である。立

海は、台風の直後の関係で荒れに荒れている。船室に居たのでは、すぐに船酔いにやられてしまうので、志願して対潜見張りに立った。船尾に立てば、船首のほるか上の方に波がしらが見える。次の瞬間には、船尾が波がしらにのつて、船は逆さまに立ったようになる。そしてスクリュウが空廻りして、腹わたをえぐるような響きが船内を走る。全く生きた心地はしない。ほとんど全員が船酔いにや

ち並ぶ椰子の木、店先に並ぶたくさんの果物、原色の軽やかな服を纏った現地の人々、まさに夢の国である。ここ仏印（ベトナム・カンボヂヤ・ラオス）は字の如くフランスの統治地であつた関係で、街は清潔で緑が多い。市場のにぎわい、街の活気を見るにつけても、戦争といった厳しく暗い面影はその片鱗もない。

一週間ほど休養し、補給を行つた後、サイゴン港から河川用の蒸気船によつて、メコンデルタの中心地ブノンペンに向かう。ここではわずかに二日間の滞在だったが、王宮や市場を見学し、大いに好奇心を満足させた。

ブノンペン駅より列車に乗つてタイ国を横断し、マレー半島のペナンに向かう。機関車は薪を燃料とする蒸気機関車で、兵員は馬同様に有蓋の貨物列車に乗る。窓もなくスプリングも無い貨車輸送は全く大変である。光線と空気を入れるための中央の扉を開いてゐると容赦なく機関車の火の粉がとび込んで来る。五日ほどかかつて、バンコクを過ぎマレー半島の果てしなく続くゴム林を通つて、ペナン島の対岸プライの駅に着いて下車する。

ペナン島は昔から有名な観光地であるが、港はマレー領内唯一の良港で、ビルマの補給基地ともなつてゐた。またこの港は大戦中、日本とドイツの連絡地となつていて、当時ナチスの旗を掲げた十数隻のドイツの潜水艦が碇泊しているのが印象深く眺められた。ここは北緯五度、赤道直下といつてもよく、日中の暑いことといつたら例えようがない。太陽

はチカチカと肌を刺すようで灼熱しやくねつという言葉があてはまる。従つて作業は専ら夕方から夜にかけて実施される。

八月二十八日、いよいよビルマ行きの最後の行程である。三千トン余りの安南丸に乗船する。この船には、連隊主力の大部分が乗船し、船室一坪当り十一人の居住割という強行輸送ぶりである。一日の食糧は水筒に一ぱいの水と乾パン一袋。インド洋は敵潜水艦の攻撃に加えて、空からの攻撃を受ける危険が大きいというので、特に対潜対空見張りを嚴重にして航進した。

九月三日、漸くにして、目的地であるビルマの首都ラングン港に到着する。鳥取の原隊を出発したのは、桜の花盛りの四月であつたから、丁度半年をかけて目的地に到達したことになる。「異境数千里」という言葉が実感として感じられる。

着岸後、直ちに下船開始、歩兵部隊は埠頭から二キロばかり離れた元の兵站病院の跡に赴いて仮泊、荷物、馬匹ばひつの担当は徹夜で荷おろし作業に当たる。病院跡は爆撃によつて瓦礫が散乱し全くの廢墟はいきょである。いよいよ戦地に來たとの感を深くする。翌四日の昼前、東の方から地鳴りのような爆音が聞こえる。外に飛び出て見ると、双胴の爆撃機コンソリが十数機、高度二千メートルを整然と編隊を組んで近づいて来る。爆撃のこわさを知らない私たちは、好奇心もあつて堂々たる編隊飛行を感じて眺めていた。ところが頭上に近

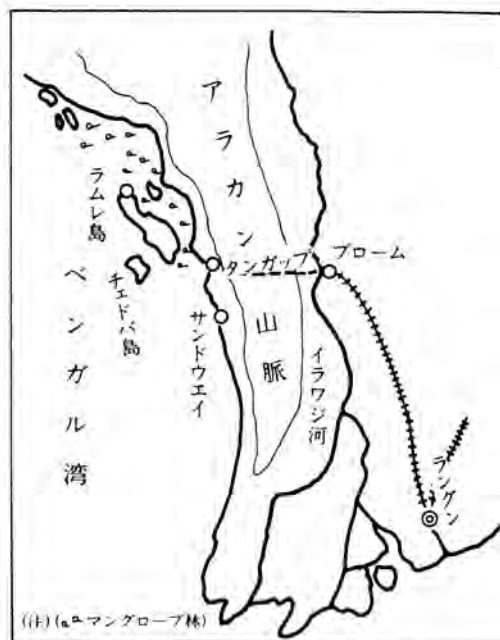
づいた途端、一斉に爆弾をばらまき始めた。みんながあわてて物陰に身を隠したとたん、近くで物凄い爆裂音が起こった。爆撃の目標は、昨夜下船した私たちの船団だったのである。安南丸はじめ僚船はことごとく爆沈させられてしまった。爆撃がもう一日早かったなら、私たちも海の藻屑になっていたのかと思うと、戦場における「運命」について考えさせられるところがあった。

四、西海岸の防衛

(1) サンドウェイへ先遣

上陸から僅か二日経った九月五日、第三大隊の警備地となる西海岸のサンドウェイに先行し、同地の警備隊から引継ぎを受けるよう命じられた。早速五名の部下を選出、六日の列車便でプロームに向かって出発する。途中空襲を避けて何度か停車を余儀なくさせられたが、夕刻無事に第一ポイントのプローム駅に到着する。

プロームの街は人口が五百人位もあつたろうか、激しい爆撃によって町はほとんど荒れている。焼けこげた木の枝に小猫ほどのこうもりが不気味にぶら下っている。



(注) (a) マンダローア林

ブROOM付近で河幅は三百メートル位もあろうか。工兵隊は敵の空襲を避けて、昼の間は舟を出さない。夜の便で、積まれた荷物の側に乗せてもらって無事渡河をする。

さて、それからがまた大変である。ここから西海岸までの間は、原始林に覆われた峻険のアラカン山脈を越えなければならない。今次の戦争に際して、このアラカン山脈に、二本の横断道が作られた。その一本が、今私たちが越えようとしているブROOMから西麓のタンガツプに通ずる軍道である。千メートルから二千メートルの山の嶺々を繋いで百六十

友軍は、町のまわりの茂みの中に点々とニツパ椰子の葉を屋根にした小屋を作って起居している。あちこち訪ね歩いて、イラワジ河の渡河を担当している船舶工兵隊の事務所を探し、渡河を依頼する。イラワジ河は、ビルマーの大河で原流は遠くヒマラヤ山系に発し、ビルマ全域の水を集めて滔々と流れている。特にこの時期は雨季の最中のこととて、満々と濁流を湛えて矢のような流れである。ここ

キ口、急峻と泥濘の道である。この道は敵機の格好の目標となるため、昼間は通行禁止である。

幸いに、軍道の途中まで荷物を輸送するトラックに便乗することができた。下車すると輸送隊の好意で、丸竹の先に油をしみこませた布を付けた急造の「たいまつ」を手にすることができた。たいまつは照明用ではなく、虎よけ用である。この原始林には虎が出没して、時々人をも襲うそうである。事実、私たちの後を追及して来た本隊の第十一中隊の兵隊が夜間歩哨に立っていて、虎に襲われ戦死者第一号となった。

夜間、手に手にたいまつを振りながら行進する姿は、まるで江戸時代を想起させられる。昼は茂った樹の下で仮眠と休養、専らの夜行軍でようやくにして第二ポイントであるタンガップに到着したのは、プロームを出発して四日目のことである。タンガップは僻地の小部落であるが、軍道の終点で、南西部海岸防衛の要である。部落は、爆撃によって完全に破壊つくされ、集落の中は爆弾によってできた大きな穴だらけである。

さて、ここから山伝いに南下してサンドウエイに向かうのだが、僅かにけもの道がある程度で、雨季の行軍には難渋した。土砂降りの雨に打たれながら樹の下道を辿ると、「山蛭」が降って来る。暫く歩いて休憩すると、体のあちこちがむず痒いの（かゆ）に気付く。服を脱いで見ると、腹や背中に物すごく大きな蛭が吸いついている。無理に引っぱって取ると、

皮膚を破いて血が止まらなくなるので、煙草の火を蛭につける。すると蛭が体を小さくしてポロリと落ちるので、それをすかさずつまんで投げ捨てるのである。蛭は一体、いつどのようにして服の中に入り込むのか全々気付かないので厄介である。

この行軍で最も困ったことは、川を渡ることである。タンガップからサンドウエイまでの間で大きい川が二本ある。テード川とサンドウエイ川である。テード川の川岸に着いて見ると、河は満々と水を湛^たえて、しかも水が川上の方に向かって逆流している。海岸に近いこの川は、潮の満干の影響を直接に受ける。今、潮が差しているのである。住民は、干潮時に歩いて渡るそうである。我々も万事休すで、次の干潮まで六時間の休憩となった。タンガップを出発してから二日目漸くにして、目的地サンドウエイに到着した。

(2) サンドウエイの守備

サンドウエイは、この地方の県庁の所在地で、人口は千人にも満たない小じんまりとした美しい町である。未だ一回の爆撃も受けたことがなく、住民の生活にも活気が溢れている。同地の海岸には、小さいながら良港があつて、敵の上陸が予想される地点である。

早速、県庁に陣取っていた前任の第五十五師団（壮兵団・善通寺編成）の橋本大尉から所要の引継ぎを受け、陣地や地勢を視察したりして本隊の到着を待った。九月二十八日第

三大隊の主力が到着したので、先遣の任務を解かれ原隊の第十一中隊に復帰した。

私の小隊は、大隊の防衛正面の一番北の端のグワ地区を担当することとなり、五十名の部下を指揮して所命の地区に到着した。海岸線は遠浅の砂地で、浜辺は植林されて立派に育った椰子林がどこまでも続いている。洵に風光明眉である。点在する集落のほぼ中心になるグワの部落を小隊の本部と決め、二軒の民家を借り上げて宿舎とした。

この地方の民家は、至って簡素で、太い竹を堀立てにしそれに同じような竹を結びつけて梁にする。真直ぐな小さい竹を並べて床地とし、床と壁は、身の薄い竹を割ってつぶして編み上げたものをくつつける。屋根はニッパ椰子の葉を重ねて組んだ屋根材を隙間なく並べる。家は一間で、隅に土で炉を作つてでき上がりである。

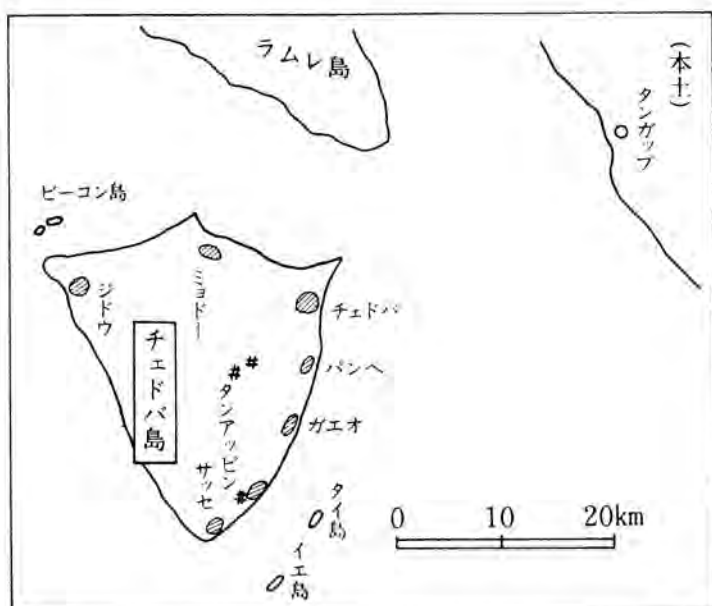
私たちにとって初めて接するビルマ人であり、彼等にとつても初めての日本人である。言葉は皆目通じない。互の意志のやり取りは身ぶり手ぶりである。鶏や卵そのほかに必要なものの買い付けは結構うまくできる。しかし、買い付けで一番困ったことは「半分」だった。米の売り買いの基準は、日本の一斗舂ほどの大きさの竹籠であるが、その籠の半分買いたいというのだが、なかなかうまくいかない。結局、籠に米を一ぱい持つて来させた上で、その半分会返して決着したのだが、言葉の中で、絶対に身ぶり表現ができないのは、形容詞や副詞の類だということがわかった。

日本の兵隊が、どこへ入っても先ず最初に覚える言葉は、「ありがとう」という言葉である。何か手伝ってもらったとき、たばこの火を借りたとき、その都度「ありがとう」という。日本では、感謝の言葉を発することで相手との親密さを増し、相手に感謝する気持ちを表すのが普通である。ピルマ語で、ありがとうに相当する言葉は「チーズテマリー」である。

現地の生活に少し馴れたところ、通訳として雇っていた少年が、「マスター（彼等は日本兵をこのように呼ぶ）、チーズテマリーは、あまり使つてはいけない。」という。訳を聞いて見ると、「ありがとうという言葉は、人々が生別する時に初めて使う言葉である。相手から受けた恩を、もうお返しする機会が無いという時に、ありがとうという言葉で恩を帳消しにする」というのである。そう思つて彼等の生活を見てみると、他人の家で食事をごちそうになつても、帰りぎわにたださよならだけである。これは、他の人から恩を受けた時は、自分も必ず誰かに、同じように恩を与えることが大切で、言葉だけで返してはいけないというのである。

それでも、日本の兵隊たちは、ことごとに「チーズテマリー」を連発していた。

(3) チェドバ島の守備



昭和十八年十一月、敵のラムレ島に対する威力偵察が盛んになり、連隊は配備を変更して、連隊主力を以てラムレ島を、第三大隊を以て沖合いのチエドバ島の防衛に当たることになった。私たちは命令によって、サンドウエイの陣地を撤し、タンガップから夜陰を利して、工兵隊の大発動艇、小発動艇に分乗して新任地のチエドバ島に上陸した。この島は、縦横が三十キロ余りの菱形をした島で、ベンガル湾に突出しており、敵上陸の公算の高い島である。

私たちの第十一中隊は、遠浅の海岸である島の東側の防衛を命ぜられた。私の小隊の警備区域は、東海岸のパンベからサツセまでの二十キロである。僅か五十人の兵力で広い地域の防衛を担当するのだから、とても尋常の方法では無理である。そこで各村々

を回って自警団の組織を作らせ、敵に関して異状があれば直ちに報告させること、各地区での陣地構築には人夫を差し出して協力させること等の任務を与えた。この島の住民も非常に親日的、協力的で誠意をもって協力してくれた。

村の人たちは朝に晩に宿舎に出入りして、食住について何くれとなく世話をしてくれる。互いに気心が知れ合うようになると、病人が訪れるようになる。彼等はバナナの房や椰子の実を持って治療を頼みに来る。そんな時、薬は何でもよく効いた。大きく口を開いた化膿の傷でもヨーチン（沃度チンキ）を塗っただけで四五日もすれば治ってしまう。背中一面に吹出ものを出した娘さんが来た。患部をよく洗わせて、齒磨粉を一面に塗ってやる。それでもてきめんによく効いた。仁丹や征露丸はいうに及ばず、齒磨き粉や保革油までも彼等にとつてはよい薬であった。

昭和十九年一月、私は警備地区内の四キロほど沖合いにある「イエ島」の状況視察に行くことにした。この島は長さが千五百メートル幅が五百メートルほどで、両端に小さい部落が二つある。風の日を選んで丸木舟を借り、兵二名通訳一名と私の四人で島に向かった。丸木舟というのは、読んで字の如く、大木を二つ割りにして、中をくり抜いた、幅が一メートル、長さが八メートル位の小舟で、余り安定はよくない。かつて学生時代に宍道湖で練習した和船漕ぎの力を以て、外洋へ乗り出すのだから聊か大胆過ぎた計画である。私

たち日本人が渡るのはもちろん初めてである。敵の諜報員が来島した可能性もあり、十分に警戒しながら上陸する。集落に着いて村長から一通りの状況を聞いた後、通訳が真顔で、「島のまん中に龍が二匹いて、時々あばれるので住民は困っているそうです。」と言う。そんなばかな話があるものかと思つたが、更に通訳は、

「島の中央は小石交じりの丘で、山頂付近に穴が二つあり、その底に龍が一匹ずつ住んでいる。平素は、穴の底でフーフーと荒い息をしているが、時には小石や砂をはね飛ばして穴から出て暴れる。」と言う。未知の世界のことでもあるので、あるいは今まで我々が知らない何物かがいるのではと半信半疑になり、探検に出掛けてみることにした。部落の人も通訳も、危険だから「やめよ」という。止められればいよいよ見なくなる。

二人の兵には、銃に剣をつけさせ弾丸を込めさせて、いつでも射ったり突いたりできるように準備させ、私は拳銃に弾丸を込めて、まさかの時に対応できるよう備えた。暫く進むと、あたり一面に小石が散らばり荒涼とした景色となる。中央部は高さが二十メートルほどの丘になっている。三人は横一列に散開して足音を殺しながら頂上目がけて歩き出した。十メートルほど歩いては、まわりの様子をさぐり、また歩き出す。

丘の中腹まで進んで、よく丘の上を観察すると、確かに「ヒューヒュー」という音は聞こえてくるが、一面の瓦礫で草の一本も見当らずとても生き物など居そうにもない。この

時漸く気付いたのだが、これは紛れもなく「火山」である。二メートルほど空に突き出た噴火口を二つ持った極く小規模の活火山である。二つの火口は、時々蒸気に混って小石を飛ばしている。今まで火山と気付かなかったのがおかしくなった。剣を銃から外させ弾丸を抜いて、火口に近づいて見た。高さ二メートルほどに盛り上がった土柱の二基の火口が、かすかな音を立てて噴気している。火山とわかってしまえばからしくもあるが、また何時暴れ出すかわからないので、急いで丘を下った。

(4) ラムレ島の守備

昭和十九年四月、連隊命令により、第三大隊は全部チェドバ島から撤収して、ラムレ島に転進することになった。乾季も終わろうとする暑いチェドバを、親しくなった住民と別れ舟艇によってラムレ島に移った。ラムレ島に敵上陸の公算がいよいよ濃くなったので、連隊の全力を以て、この島の守備に当たろうというのである。第三大隊は、中部ラムレの守備を命ぜられた。私の小隊は、海岸の砂地から百メートルほど隔てた小高い繁みの丘一帯の防衛担当で、その正面は約二キロメートルであった。

海岸は一望の砂浜であり、敵の上陸地点としては絶好の場所である。海岸線を見通すことのできる山麓の繁みの中に、竹製の小屋三棟を建てて小隊の宿舎とした。一棟は第一、

二分隊、一棟は第三、四分隊用、そして他の一棟は小隊長の私用である。ここでは更に野砲一門の配属を受けたので、これは五百メートルほど後方の稜線に位置させた。

本格的な雨季に入る前に、海軍の協力を得て、海岸の砂浜に五十メートル間隔で地雷を敷設してもらった。小隊の日常の仕事は、上陸して来る敵に備えて山裾から山腹にかけての陣地構築である。まず最初に現地で各分隊の配備を決める。各分隊はそれに基づいて、各人各人の入る壕、いわゆる蛸壺たこぼを掘るのである。直径〇・五メートル、深さ一・五メートルの円型の穴で、蛸壺が完成すると木や土石で壕の覆いおおを作る。次には各壕をつなぐ連結壕を掘る。この陣地によって、上陸して来た敵と戦おうというのである。

第一線陣地が完成すると、次々と山腹に向かって第二線、第三線の陣地を掘り進めていく。雨季の入りを迎え、毎日毎日降りしきる雨の中で携帯している円匙えんぎ（携帯用スコップ）を使って、黙々と壕を掘り進めていく。

ビルマは貧しい国である。日本の戦前の生活よりもまだ程度が低い。特にラムレ島は、サンドウエイやチェドバに比べて一段と暮らし向きが悪い。ラムレ島での食事は全く惨憺さんたんたるものである。米はビルマの主産物であるのでたくさんある。軍がビルマ用に発行した「軍票」を使って近くの集落から買い入れる。現地の人々は秋に収穫した米を粿のまま貯蔵し、毎日その日の入用分だけを、兎の餅搗きのようにして脱穀して使用する。だから米は、

白米よりむしろ玄米に近いものである。我々が食べるのも玄米飯である。

副食に至っては全く最低である。後方からの物資はほとんど来ないので総てが現地調達である。従つて調味料は塩だけ、来る日も来る日も野草の塩汁ということになる。時折り、兵が交替で魚獲りに出かけて、塩汁の具に彩りいろどをそえる。

こんな中で、集落に食糧収集に出掛けた時の事である。その時、都合よく「筍たけのこ」があつたので早速買うことにして値段の交渉に入ると、「筍一本の値段は、竹一本の値段」だという。そんなばかなと思つて、話し合つて見ると、「マスターが今買わなかつたら、やがて竹になつて、竹を売ればよい。」というのである。時間が金銭とは関係のない社会、ビルマの現状に半ばあきれると共に感心もする。

(5) テード地区の守備

昭和十九年十月、連隊は作戦計画を変更し、タンガツプを中心にした縦深陣地をとる事として、ラムレ島には第二大隊のみを残し、第一、第三大隊を、タンガツプとその南部のテード地区に移動させることにした。私の第十一中隊は、サンドウエイに近い、テード川からサンドウエイ川の間地域地域の防備を担当することになった。ここでも陣地構築と戦闘訓練の毎日である。早いもので、私は現役が終わり陸軍少尉に任官してから二年が経つた

ので、十二月一日付で陸軍中尉に進級した。昭和十九年も十二月になると、海岸やラムレ島に対し敵の海からする威力偵察が増加し、敵の上陸進攻も遠くあるまいと思われるようになって来た。しかし、私の小隊は連隊の最南端の警備担当であつたので、比較的緊迫感が少なかった。

ここでの、小隊長である私の宿舎は、部落の中央部で老夫婦の住んでいる木造家屋の一室を借りることにした。この老夫婦はとても気だてがよく親切で、万事家族か客人を遇するような温かさがあつた。部屋のテーブルの上にはいつもバナナが一房置いてあつた。私がかれを食べてしまうと、次の日には必ず新しいのが置かれていた。私も彼等には格別の親しさを覚えて、夜は八畳吊りの蚊帳かやの中で一緒に休ませた。ビルマでは、マラリアを媒介する蚊が大敵であるが、もちろんビルマ人には蚊除けのような物は持てない。彼等の喜びようも大変なものであつた。三か月ほど経って、いよいよここを引き揚げることになつた時、「どうか行かないでくれ」「行くのをやめて家の養子になつてくれ」と哀願されるほどだった。

ここでの警備中のでき事で忘れられないことが二つある。その一つが椰子酒の泥棒事件である。ビルマでは、川口の淡水と塩水が交じり合う地点に、水中からニツパ椰子が群生している。この椰子は日本の茅かやのような形で、葉の長さは三メートルにもなる。現地の人

はこの葉で家の屋根にするアモ―を作る。この木からとった酒が「椰子酒」である。椰子が少し古くなると根本から一・五メートル位の長さの果茎が伸びる。この果茎の先を切ると樹液が出る。その樹液を集めたものが椰子酒である。切口に竹筒を受けて置くと、中にたまった液は自然に発酵して酒になる。適当な甘味と酸味があり、アルコール度は日本のビール位である。

ある朝、兵隊の宿舎へ出て見ると、みんなが車座になって椰子酒を呑んでいる。「隊長殿も如何ですか」と奨められるままにご馳走ちきそうになることにした。夜の冷氣でほどよく冷えていてとてもおいしい。あくる朝も、当番兵が「隊長殿、氣付け葉を少し持つて参りました。」と例の酒をすすめてくれる。ありがたく頂戴ちやうだいしたまではよかったが、三十分もすると腹の調子がおかしくなる。やがて、下痢と嘔吐おうとの連続である。当番兵を呼んで事情を聞くと、朝酒を呑んだ連中は全員そうだと言う。そして「どうも毒を入れられたらしいですわ。」と。彼の話によると、昨日の朝、茶目氣のある兵隊が住民より先に起き出して、ニッパの酒液を集めて帰ったのが、昨日の酒。それに味をしめて今朝もまた取りに行ったとのこと。経理担当者に金を持たせ持主のところへことわりに行かせて、一件落着となったが、以後はみんなはこりごりしたらしく二度と泥棒事件は起らなかった。

もう一つのでき事は、昭和二十年正月の「ぞう煮」である。十九年もおしつまった十二

月のある日、中隊から正月用品として、一人に紙巻タバコこ、焼麩が四こ、それに小隊用として、小豚が一頭支給された。正月までにまだ日もあるので、豚は兵舎脇に深い穴を掘って飼って置くことにした。穴は深さが二メートル位、周りの壁は垂直にし、なお念のために周囲を竹垣にして絶対逃げられないようにした。

ところが、翌朝目覚めてみると、竹垣いは壊れていて、中の豚がいなくなっている。穴に近い兵舎の者の話によると、確かに夜中に豚の悲鳴を聞いたという。多分、虎にやられたろうということになった。しかし、何はどうあれ、正月用の料理の材料が無くなったのは事実である。相談の結果、山に入って何か豚に代るものを獲_とつて来ようということになった。住民の話によると、アラカンの山には、虎、象、猪、鹿、山あらし等たくさんの動物がいるという。

早速、射撃の上手な兵二人に軽機関銃と小銃を持たせ、山にくわしい現地人二人を雇い私と五人で山に入ることにした。一行はテード川沿いを奥へ奥へと分け進んだが、一向にけものと出会わさない。その日は山の集落で一泊、そこでいろいろ情報を得て、翌日は象射_うちをすることにした。

翌朝しばらく歩くうちに山の崖で巨大な足跡を発見、象の群れが通った跡である。群を射つのは危険だということで、単独で行動している足跡を追って歩き続ける。象の糞があつ

た。まだ新しい糞である。用心深く、なおも足跡をたどっていくうちに、崖がけの上で牙きばをみがいた跡、高い木の枝に背をこすりつけた跡が見られる。足音を殺しながらなおも前進するうちに、ついに象発見、たった一匹で無心に竹を食べている。腹はら這はいになって稜線りょうせんまで前進すると、同行のビルマ人が「待て」という。彼は、枯れた木の葉の粉をつまみ静かに落として見て、それがかすかに象の方向になびくのを見て、象は鼻がよく利くから、これ以上進むのは無理だという。仕方なく、ずっと後退じきりをして、今度は大きく風下に迂回して再び象に近づく。象は我々に気付かないで、しきりに竹を折って食べている。距離五十メートル、象の耳をねらって軽機関銃を発射する。軽機関銃の齒切れのよい発射音が森に響く。大分射ったなと思うころ、象がその場でどすんと横倒しになる。やった、遂に仕とめた。後で調べてみると、残弾が三発、すなわち二十七発を射ち込んだ事になる。

それから、各隊や現地の住民に肉をとりにくるよう連絡しなければならぬ。何分にも奥深い山の中のことであるので、みんなを信用させる証拠として、象の鼻先きを切り取り竹に通して持って帰らせた。私の小隊はもちろん、近隣の隊、現地の住民がたくさんやって来た。肉を適當の大きさに切り取って、それに竹竿を通して二人で担いで帰るのである。正月は、象の肉のごちそう。みんなで「ゾウニ」「ゾウニ」とはしゃぎながら正月を祝った。

五、戦闘開始

(1) ラムレ島に敵上陸

昭和二十年一月二十一日朝、予想の通り第二大隊が守備していたラムレ島の北端キャクピューに、敵約一箇師団が上陸して来た。これが、わが百二十一連隊の最初の戦闘である。その時の状況を、当時キャクピュー守備隊であった第六中隊の山根指揮班長は、次のように連隊史に寄稿している。

二十一日未明、マウントペーター監視哨かんししやうから、「敵船団約三十隻南下中」の電話報告、時を移さず、三五三高地展望哨からも同様の報告が入って来た。及川中隊長は「全員非常配備の用意」を命じ、三五三高地に急進、私も同行して双眼鏡を覗のぞいた。レンズ一杯に悠揚ゆうやう迫らぬ敵海軍の威容、何とも言えずただ憤りに燃えたつた。「いよいよやつて来た。」しっかりと冠かぶる鉄帽、いまや戦闘開始の直前である。この時、先攻のハリケーン数十機が中隊陣地上空にやって来た。低空である。双胴双発のロッキードの編隊もやって来た。

岩寺がんくう（岩窟陣地）の小川小隊、ウエストポイント監視哨、マウントペーター監視哨から



ひっきりなしに敵船団の行動を報告して来る。中隊からは、ユワテの大隊本部に無電（無線電信のこと）報告する。マウントペーター監視哨は海軍の所属であり、十五センチの双眼鏡があつて、一万メートルの範囲は手にとるように見えるという。敵の艦船は次第に接近して、その巨体が数えられる。一万トン級の輸送船三隻、五千トン級五隻、三千トン級八隻、それに戦艦三、重巡洋艦三、駆逐艦五、砲艦四など。まさにキヤクピュー

海上を圧して、港から五キロ付近の洋上で碇泊した。ついに先程までのどかだったキヤクピュー沖がまるで神戸港と錯覚するほどに一変してしまった。艦載機がたち上つて船団上空を護衛する。実に堂々たる構えである。上陸用舟艇を母船から降ろすクレインの音が聞こえるようである。やがて一斉に艦砲射撃の火ぶたが切られた。砲声は天地をゆるがせ、海岸周辺は爆煙濛々、すさまじい光

景が三十分以上も続いた。次いで西方上空から三十数機の重爆の編隊が、低空で戦闘機群をのり越えて大量の爆弾を投下、その激しさに島は潰れんばかりである。われわれは、唯じつと忍んで互いに激励し合いながら敵の上陸を待つのみである。

ラムレ島の守備隊一一大隊に対し、敵は英印第五十五師団の主力を以て上陸し、しかも日夜敵機の攻撃にさらされ、更にまた島の周囲は、ことごとく敵艦船によつて包囲されるという状況の中で、第二大隊の苦戦は続いた。二月十八日、連隊は、第二大隊の任務は終了したとして、全員本土への撤退を命令した。

本土とラムレ島の間は、およそ三十キロ、そのほとんどがマングローブ林に覆われ、ラムレ島寄りに川幅五百メートル、最も狭い所で百メートル余りのミンガンクリークが通つていて、常時、敵の砲艦や舟艇が監視に当たっている。

マングローブの林とは、熱帯地方で遠浅の湾内や河口付近の泥海にできる林のことである。ビルマでは干満の差が三メートルほどもあり、満潮時には海の中の林となり、干潮時には泥地を露出して、何とか歩行が可能となる。植物は、オヒルギ、メヒルギまたはそれに類する樹々で、樹の形も地上のそれとは全く異つた景觀を呈する。木の枝から呼吸根や支柱根を無数に垂れ下がらせているもの、通常蛸たこの木といわれる、樹の根本が数十本に分

かれて広く根を張っているもの、泥の中から筍の様に突き出て枝も葉もないもの等々さまざまである。

第二大隊の将兵は、三々五々と戦線を離脱して、夜陰を利用してミンガンクリークの嚴重な敵艦船の警戒をかくぐり、マングロープ伝いに本土にたどりつくのである。敵艦艇に発見されて後帰りし、また突破を強行して銃砲撃に斃れる者数知れずの状況で、この戦闘においては大隊長以下三百人、約三分の一の者が不帰の人となった。

(2) 遊撃隊長 敵と組討ち

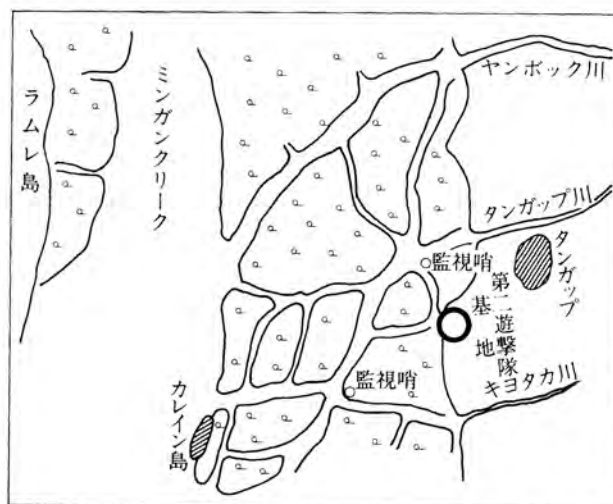
二月下旬になると、敵の行動はいよいよ活発となり、タンガップ北方で上陸の公算が強くなった。連隊は、第一、第三大隊をテード地区から、急遽タンガップに招致し、北方に対する警戒を嚴重にすると同時に、第三大隊から「遊撃隊」二隊を編成し、敵の上陸の企図の早期察知と、併せてラムレ島から逐次撤退する友軍の收容に当らせることにした。

第一遊撃隊は第十中隊の須田少尉を、第二遊撃隊は第十一中隊の小松中尉を長とし、それぞれ一こ分隊（約十五名）を率いて、現地ビルマ人の服装をさせ、敵の後方に潜入させることにした。隊員には、ビルマ人の服装であるエンジー（シャツ）とロンジー（巻スカートのような布）、竹製の帽子、ゴム草履、それに布製のローエ（肩掛の袋）、ダー（刃の長

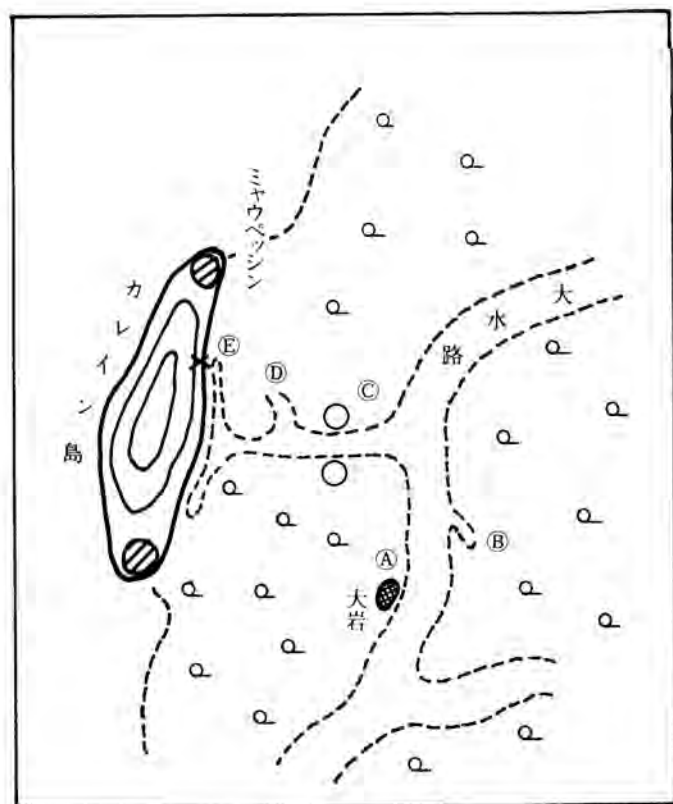
さが五十センチ位の山刀)が支給になった。
 私は、早速現地人になりすました部下を伴って、タンガップの村外れのマングローブ林の縁に基地を設営した。そして部落から丸木舟三艘^{そう}を借り入れ、水路の要所の樹上に、監



ラムレ島に放置された英戦車の残骸



若し敵が同島に砲を持ち込めば、タンガツプの我が軍はその射程の中に入ってしまうもので、我が軍の配備上に重大な影響を及ぼす。また、もし敵が上陸していなければ、ラムレ島から帰還中の二大隊の兵がいる可能性もある。何れにしても、この度は隊長自ら搜索を



視哨を設置した。

三月一日、連隊長から次の要旨の命令を受けた。

「ミンガンベリク南端にあるカレイン島は、既に敵が上陸した公算大なり。第二遊撃隊は、同島の敵情、特に砲兵陣地の有無を搜索し報告すべし」

同島の搜索には、既に桐工作隊が、数度にわたって偵察を出しているけれども、その状況が明らかではない。

実施する必要がある。

そこでまず、豪胆で沈着な清水兵長（京都府竹野郡出身）と熊谷兵長（神戸市出身）の両名を部下に選定、舟は現地住民が粃もみを運ぶことを想定して、舟の中央部に棧板を置き、その上に粃殻をいっぱい積んで準備をした。携行する兵器は、私は拳銃、それに小銃一挺を粃殻の中にひそませ、二人の兵には、ダーと手榴弾しゅりゅうだんを持たせることにした。

三月五日の深夜、まず上げ潮に乗って水路の途中分岐点まで前進、そこで潮が下げ止まるまで舟の中で仮眠、潮の流れがゆるやかになったのを見計らって、日の出前にカレイン島の西四百メートルの処にある大岩（A）に到着する。大岩は、文字通り周囲が三十メートル、高さが十メートル位の二つの大きな岩の塊かたまりで、マングロープの中にどっかと坐っている。岩に生えた木に登って見ると、目指すカレイン島が目の前に眺められる。この日は、終日樹上から島のようなすを見張ることにした。島には、南北の両端に集落があり、全体が盛り上がったような岩山で、緑の樹木に覆われている。樹上からは、南の集落とその付近が展望できる。

午前中は、緊張して監視に当った。が一向に変わった様子を感じられない。時折、集落から鶏の甲高い鳴き声が響き、犬のほえる声が聞かれる程度で、まことにのんびりした情景である。

午前中の監視の結果、敵は未だカレイン島に上陸していないものと思われる。よつて今晚、島に上陸して直接偵察に当たることにした。夕刻まで引き続き監視に当たることにしたが、気の緩みもあつて、うっかり木の葉を集めて、お茶わかし用の焚火をしてしまった。二時間ほど経ったかと思われるころ、下のマングローブ林から数人のビルマ人の声高な話し声が聞こえ出した。焚火の煙を見て様子を見に来たものらしい。話の内容はわからないが、その調子から敵意が感じられる。早速、焚火を消して、岩陰を滑り降りて身を隠す。彼等は十人位だろうか、しきりに声を交しながら岩の頂に登つて来る。何せ狭い場所なので、万事休すの状況、止むなく拳銃をとり出して、二発威嚇射撃をする。驚いた彼等は、蜘蛛の子を散らすように一目散に逃げていった。

かくなつた上は長居は無用と、早速舟にもどつて出発の準備をする。ちやうど潮は引き始めている。夜になるまでの数時間、どこかへ退避しなければならない。何時また、偵察の舟が現れるかも知れない。この時、都合よく大岩からそう遠くない所で、大水路から、やつと舟の幅ほどで、奥が直角に折れ曲がつた行き止りの小水路が見つかった。おまけに小水路の入口には、水路を塞ぐような形で大きな木が横たわっている。(B)これ幸いと、舟を操つて、その水路の一番奥まで入り込んだ。潮はだんだんに引いて、遂には、水路全体が干上つてしまい、舟は、大水路から僅か十メートルほど離れたマングローブの土の上

に坐つてしまった。

果たせるかな、夕刻になると、前の水路でわいわいがやがやビルマ人の声がある。舟の数にして、五六艘もいるであろうか。舟の底に身をひそめて、じっと息を殺している。まさか彼等は、私たちが干上った土の上にはいようとは思うまい。三十分位往きつ戻りつしながら搜索した後去つていった。やれやれ、これで第二の関門を過ぎたことになる。

さて、いよいよ夜となつた。都合よく真月の闇夜である。携帯食で夕飯を済ませ、潮が満ちて来るのを待つ。夜中の二時過ぎ、潮も満ちて舟が浮いて来たので、徐ろに大水路に出る。水をかく音をなるべく立てぬようにして、カレイン島の水路に入る。川幅は三十メートルほどである。空一面文字通り寶石をちりばめたように、大小の星がキラキラと輝いている。櫂の使用をやめて、舟を上げ潮にまかせて徐々に島に近づく。しばらく進むと、水路の両側でビルマ人の話し声や、せきばらいが聞こえる。敵の検問所があつたのだ。(◎)この川幅で、しかも上げ潮の中で、気づかれないように舟を廻して引き返すことはできない。もし発見された時は、その時のことと腹を決めて、川の真ん中を潮にまかせて音も無く進む。(◎)彼等にも、まさかという油断があつたろうが、闇と潮が幸いして無事に第三の難関を突破することができた。

舟を操つて、島から百五十メートルほど離れた小水路に入り込み、そこで夜明けを待つ

ことにした。(⑩) 何時間か待って、やがて夜明けの薄明かりの中で、まわりのマングローブがうつすらと見えだして来た。幸いに潮は引き切つて、舟の場所から島までは完全に泥の海になつてゐる。私は布袋に拳銃と地図を入れ、二人の兵はそれぞれダー(山刀)を持って出発した。もちろん服装はビルマ人のそれで、ロンジーとエンジーである。

島に辿りついて見ると、島は海岸線からすぐに急な山の斜面になつてゐる。そして海岸から三メートル位上つた所に、南北の二つの集落を結ぶ小径が通つてゐる。路面を子細に調べて見ると、軍靴の鋌の跡が無数に見られる。友軍のそのようにも見えるし、あるいは少しばかり大きいようにも思える。ラムレ島を逃れた二大隊の兵が立寄つたかも知れないとも思ひながら、まず道端の叢に身を隠して状況を窺うことにした。暫くするうちに、ビルマ人の一隊がやつて来た。道から僅か数メートルしか離れていない草の蔭で、体を伏せ息を殺して彼等が通り過ぎるのをまつた。ありがたいことに、彼等は私たちに一向に気付く気配もなく、声高にしゃべりながら通り過ぎて行つた。

この一行の、おしゃべりの中に確かに「いぬ」「にわとり」といった日本語の単語が入つてゐた。日本兵がゐるのだろうか。それともビルマ人が英印の兵隊の一行に日本語を教へてゐるのだろうか。しかし昨日の大岩の件、監視哨の件から、敵の可能性が高い。判断に迷つてしまつたので、直接に集落に出かけてこの眼で確かめようと決心した。

二人の兵隊に、このことを伝え、「行くぞ」と短く命令して立ち上がった。一本道の前進は、私が先頭、後に清水、熊谷と続く。山の斜面にかかる小径を、北端の部落「ミヤウベツシン」に向かって出発した。

五、六百メートル歩いて、山の鼻を廻ったとき、息も止まるほどびっくりした。十五人位のインド兵の巡察隊が、着剣した小銃を肩にかけて、同じ一本路を一行になつて進んで来るではないか。路幅は僅か三十センチ、左は急な岩山、右下は一面の泥の海、一前進か、後退か、それしか選択の余地はない。後退すれば、自分たちより優勢な彼等に追撃されることは必定だ。瞬時の判断で、後続の二人をふりかえり

「行くぞ！」

と、低い声で命令する。(E)

敵は、こちらの服装からビルマ人と思い込んでいるらしく、特に警戒している様子はない。我々をビルマ人として通過させてくれれば、というほのかな願いもある。一步一步お互いの距離は縮まってくる。ついに、双方がぱったりと出会つてしまう。緊張の中にも無理に笑顔を作つて、ビルマ人の朝の挨拶「タミン、サービビラー」(朝飯は済みましたか。)と言う。私たちをビルマ人と思い込んでいる敵の先頭の兵が、英語で何か喋りながら、私の体に手を触れて身体検査を始め出した。私は、じつとして突っ立っていたが、や

がて私の袋の中を調べようとした。万事休す、袋の中味は拳銃と地図である。私は突差に袋の中に両手を入れて、拳銃の装填（装うてん）（弾丸を込めること）をして、彼の胸に銃を当てた。ところが私もあわてていたらしく、銃は二重装填（銃の薬室に弾丸が二発入ること）になつて、ただ引き金がかチツと鳴るだけで弾丸が発射できなかった。

敵は不意をつかれて、持っていた銃を投げ出し組みついて来た。二人は、互いに組み合つたまま、下の海岸まで転げ落ちてしまった。続く清水と熊谷は、持っていた山刀で後の敵兵に切りつけた。後続の兵たちは、前で何か大変なことが起こつたと知つて、驚いてもと来た道を一目散に逃げ帰つていった。崖の下で組み合つたままの私は、

「隊長殿！、敵は皆逃げました。早く逃げましょう。」

という二人の声で、我にかえり組み手をほどいて道に這い上つた。

逃げ去つた敵は、未だ態勢を立て直して向かつて来る気配が無かつたので、ぶん取つた銃の剣を外して、射ち方を兵に教えてやった。何しろ多勢に無勢で、一刻の猶予もできない。干潟となつてゐる泥の海を、必死で朝の舟のところまで走つた。果たせるかな、途中でバンバン射つて来る。股が引き裂けるように痛い。無我夢中で舟にたどり着いた。しかし舟は、引き潮で土の上に坐つたままである。よし満潮であつても、昼間に検問所を突破することは不可能に近い。

舟から、持つて来た小銃、手榴弾^{しゅりゅうだん}、乾パンの残り、水筒、それに捕獲した銃と濾水器^{ろすい}（聴診器のゴムを一本にしたような形で、先に活性炭をつけて水の浄化に使う）を取り出し、マングローブの泥の中を、本土目指して歩き出した。泥の海は、普通脛^{すね}の中ほど位まではまるが、深い所になると膝まで没する。敵との距離を少しでも遠くして追撃されないようにと気はあせるが、歩行は思うにまかせない。

やがて潮が満ち始めて来た。マングローブが潮に乗れば、もう敵の追撃はないであろうと一安心する。満潮ともなれば樹は一メートル位水につかるので、格好な樹を選んでよじ登り、樹上で休憩する。次の引き潮まで四時間も五時間も樹上にいなければならない。夜になって、ようやく潮が引く。朝から三人がたった一本の水筒で過して来たのだから、何分にも喉^{のど}が渴いてたまらない。そのうちに熊谷君がよいことを考えてくれた。

まず水筒に塩水を汲んで木の根っこに立てる。そして樹上から枯枝を集めてきて水筒の周りで火を焚く。水筒の口に濾水器の頭を被せる。濾水器のゴムを伝って出て来た水蒸気を濡^ぬれた布で冷す。小学校の理科の実験さながらである。でてくる水は一分間に僅か数滴だが、かわるがわるにこれを舌に受けて何とか渴^{しの}を凌ぐことができた。

やがて朝が来た。今度は空腹でたまらなくなった。何しろ昨日の朝以来何も口にしていないのだから無理もない。マングローブの中で食べ物となるものは、水路の中の魚しか

い。そこで一計を案じて、魚獲りをするにしたり。それは、手榴弾の安全栓を抜き、発火させて水中に投げ込むのである。すると水中で爆薬が破裂し、衝撃で魚が浮いて来る。それを拾い集めて、そのまま食べるのである。漁獲は少なかったが、これで何とか渴きと飢えを凌ぐことができた。

苦心^{きんたん}慘憺、カレイン島を出発してから丸二日かかって基地に帰り着くことができた。早速、偵察の状況、敵状を連隊長に報告し、戦利品の銃を差し出した。この度の行動で、二人の兵は沈着勇敢であつたとして、連隊長から次のような賞詞を受けた。私はマングローブ中の行動で、右足の裏に二センチほどのふみぬきをしたので歩行がやや困難となり、すぐにタンガップの野戦病院へ入院して治療を受けることにした。

賞 詞

陸軍兵長 清水悦郎

陸軍兵長 熊谷栄治

右ハ二十年三月一日第三大隊第二遊撃隊員トシテ カレンダン島搜索ニ赴クヤ 三日
偶々同島東北海岸山径ニ於テ敵巡察兵十数名ニ遭遇スルヤ克ク隊長ヲ輔佐シソノ虚ヲ
ツキ機先果敢敵中ニ突入 或ハダーヲ振イ或ハ銃ヲ奪取シ乱戦格斗 敵ノ心膽ヲ奪イ

之ヲ擊退シ且著大ノ戰果ヲ収メタリ

兩兵長ノ旺盛ナル攻撃精神ハ正ニ軍人ノ龜鑑タルベク又聯隊將兵ノ志氣ヲ鼓舞スル所
大ナリ

依テ茲ニ賞詞ヲ與フ

昭和二十年三月十日

歩兵第二百二十一聯隊長 陸軍大佐 馬場 進 印

六、タンガップ地区の戦闘

(1) 大隊副官に就任

入院して間もない三月十日に、私は「第三大隊副官」に任命された。副官とは、大隊長の戦闘指揮を補佐する役目で、学校でいえば、校長に対する教頭の立場である。常に配下の第九、第十、第十一中隊と、第三機関銃中隊、第三歩兵砲小队および配属諸隊の現況を把握し、これらに命令を伝達し、また軍医官、主計官、獣医官等の協力を得て、大隊内の給与、補給、戦死傷者の処理等広汎な任務を行うものである。業務は広汎多岐、多忙では

あるが、これまでの小隊長職に比べて第一線で戦う機会が少なくなつたのも事実である。

(2) 第三大隊の戦闘概要

昭和五十八年に発刊された「鳥取綜合連隊史」に私が寄稿した文を掲げて、その概要を見ることにする。

元第三大隊副官 小松 正雄

三月十七日、ついに敵は大挙して「メイ河」を遡行して「メイ」付近に上陸し、次いで南下して「ラム」を占拠し、橋頭堡^{きやうとうほ}を築き、漸次戦線の拡大を図る。同地付近の警備に當つていた白井搜索隊（軽戦車隊）及同隊配属の連隊砲は、之と激戦を交えしも、衆寡敵せず、軽戦車四輜を破壊され戦線を離脱、敵と接觸を保ちつつ南下。この報を受けた連隊長は、直ちに十一中隊をして白井隊の援護を命ずると共に、第三大隊に出撃を命ず。

連隊命令の要旨

一、メイ付近に上陸せし敵は、その後南進の企図無きものの如し。

二、第三大隊は、主力を以て直ちにサビン付近に前進し、敵に一撃を加へたる後、タンロエ南側の要域を確保し、海陸よりする敵の進攻企図を破碎すべし。

第三大隊長は、直ちに第十一中隊を出発させると共に、第十中隊を中核とする大隊主力

執拗果敢に攻撃し来る。また、戦車を先頭に再三軍道の突破を試みる。敵戦車には、作業隊の爆雷攻撃を、随伴してくる兵には小銃隊を以て応戦し、敵の前進を阻止しつつ夕刻を迎える。敵は夕刻から戦法を変え、折柄の乾季の中で、我が陣地に対し、一斉に焼夷弾攻撃を開始する。朝から水もなく食糧もとらずに眼前の敵と激闘を続けていた兵も、火焰攻撃には勝てず、装具の殆どを焼かれ、予備弾も失い苦戦が続く。

二十日、早晩より各地において引き続いて激戦が展開された。火炮、対戦車砲を持たない我が軍は、随所に連絡を断たれ、遂に午後に至り敵戦車の突破を許すことになった。大隊長は、夜に入るのを待って、副官を諸隊との連絡のため現地に残し、直ちにタンロエ河に引き返し、敵のタンガツプ入りを阻止すべく後退、渡河点を確保し各隊の掌握に努めた。この戦闘において三九二高地を死守していた第十中隊の須田小隊長は壮烈な戦死を遂げた。（これが第三大隊将校戦死の第一号となった。）

大隊は、一部を以て渡河点を確保しつつ、主力を以て、ヤビヨールから六八三高地の線に新たに連隊の前進陣地を構築し、敵南進の企図を阻むことにした。

各隊の配備命令（略）

戦車火炮を更に増強した敵は、三月末に到り、タンロエ河を渡河、主力を以て一気に軍道の南下を試みたが、八一五高地付近の水島隊（第十一中隊）の攻撃を受けて頓挫、多大

の犠牲を払って一時撤退したが、その後、強行突破を断念し、空中からの爆撃と、迫撃砲、戦車砲の射撃を集中し、全正面にわたって浸透作戦に転じて攻撃して来た。

全正面で、連日激戦が展開され、陣内戦が行われることもしばしばとなつて来た。敵は我が方の固い守りのため多大の犠牲を払いつつ、攻撃と撤退を反覆すること約一週間。その間、毎夜の如く大隊の予備隊より斬込隊が、敵後方の砲陣地や弾薬集積所を強襲し、都度相当の戦果を収めたが、我が方にも死傷者が続出した。

四月初旬になり、敵は我が堅陣突破のための新戦術を用いてきた。すなわち、軍道沿いの陣地に対し、飛行機から信管（発火装置）つきのガソリンの入ったドラム缶を投下し始めた。起伏に富んだ山の地形を利用し、樹々の茂みに遮蔽された陣地からの攻撃に困惑した敵は、山を焼却して、陣地を裸にしようというのである。それからは、我が陣地は、飛行機や迫撃砲更には戦車砲の砲爆撃をともに受けることになった。そこで止むなく、軍道沿いの前進陣地を撤退し、軍道正面の防衛を後方に展開している第一大隊に譲り、第三大隊は、大山陣地に移動して、連隊主陣地の中地区隊となった。

このころから、敵は軍道の正面に攻撃の重点を保ちながら、優勢な一部を以て、タンロエ河谷を遡り、我が軍の後方遮断を企図して来た。従つて、大山陣地付近の一部および第一大隊の予備隊を以て、タンガツプ河上流の急峻な山地に陣地を展開し、この敵と対する

こととなった。

陣地配備命令（略）

タンロエ河の上流は、我が軍の後方との連絡路であるブROOM軍道の入口に当り、糧秣（りようまう）や弾薬の集積所があり、絶対に死守しなければならない地である。

新たに守備についた六五六高地から大山陣地にかけては、敵の攻撃が日毎に熾烈（しりてつ）になつて来た。大山陣地の北正面においては特に戦闘激しく、彼我の陣地は稜線（りやうせん）をはさんで、僅か数十メートルに近接、日中は狙撃戦（そくげくせん）、夜は夜襲戦の連続で、双方の損耗は相当数にのぼつた。

軍道方面の敵の主攻撃もいよいよ激しく、軍道を見おろす要衝（ようしやう）三七〇高地の陣地を守つていた第一大隊の小南隊は、連日連夜に及ぶ砲爆撃と敵歩兵の波状攻撃を受けて、四月五日、終に全員が死傷し玉碎（ぎよくさい）した。

第三大隊は、三月十八日サピン付近で敵と遭遇戦を交えて以来、完全な敵の制空権のもと、数十輦の戦車、絶対優勢な火炮を持つ敵と一月半にわたつての戦闘は、まさに死闘激戦の連続である。しかも乾季の最中のこととて、水もなく補給を受ける食糧も僅か日に一度という苛酷（かこく）な条件下で、旺盛な責任感と勇猛心を以て敵の南進の企図（きと）を阻止（そし）して来た。

しかるに、五月初旬、師団命令により、連隊主力及び第三大隊は、タンガップの防衛を

放棄し、新たな任務につくことになった。数十名の戦死者、数百名の負傷者を出して、タングップの五十日に及ぶ戦闘は終わった。

(3) 副官としての戦闘 ― 出陣 ―

大隊副官に就任して一週間後の三月十六日、第三大隊主力に出撃命令が出た。本来ならば、副官である私が配下の各中隊の状況を掌握知悉ちしつしていて、大隊命令の原案を作製し大隊長に提示すべきであるが、何分着任早々の新米副官として、この度は総てを大隊長にお願いして処置して貰ったもら。大隊長も、敵情の詳細が不明でありまた緒戦のことでもあるので、戦闘の計画は、平素からの訓練の通り典令に基づいて実施された。出動の順序は、先頭に尖兵小隊せん（警戒と本隊の護衛）続いて主力の十中隊、機関銃中隊、本部、大隊砲小隊その後を、弾薬や糧秣隊りょうまつが、現地徴発ちやうはつの牛車を引いて行くという大げさな行進であった。

出発に際しては、大隊長と副官は馬に乗って行く。副官にも専用の乗馬があつて、代々の副官が使用していたものである。私は見習士官当時に約一月間、姫路の通信隊へ教育派遣されていたその時、よく馬に乗って遊んだことがある程度で、乗馬（人を乗せる専門の馬）に乗るのは初めてである。

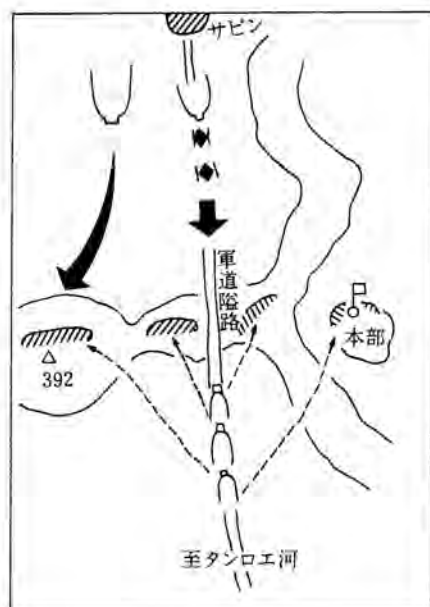
馬はりこうな動物で、乗り手が上手だと実に従順で素直にいうことを聞く。が、乗り手

が下手な場合は、ばかにして絶対にいうことを聞かない。果たせる哉、馬は私が乗ることを拒否して、前足を高く蹴って棒立ちになったり、後ずしりをしたり、斜め歩きをしたりして、何とかして振り落とそうとする。乗り手が、馬から降りるか落馬でもしようものなら、その馬は、二度と乗してくれない。とに角、両膝をしっかりとしめて、鞍にしがみつくようにして、大隊長の馬について前進した。朝方になるまで、四時間も五時間も鞍の上で頑張り通したものだから、さすがに痼の強い馬も、ついにあきらめておとなしくなった。このたびの出陣が私の乗馬の最初であり、その後は、戦闘が激しくなったため二度と馬に乗ることはなかった。

(4) 副官としての戦闘 — 遭遇戦 —

軍では、敵味方が互いに向かい合って前進しているとき、衝突するような形で展開される戦闘を「遭遇戦」と呼ぶ。遭遇戦の要訣は、「敵より先に情報を知って、戦闘に有利な地点を占拠し、前進して来る敵に先制打撃を与える。」と教範（軍隊の教科書）は教えている。

この度の戦闘では、先遣させた第十一中隊の伝令により「戦車を伴う敵の有力部隊が、サビンを通過し軍道を南下中」との報告がもたらされた。それに応じて、大隊長は直ちに



て縦に深さのある縦深陣地が確保できない。

間もなく前方で、激しい銃砲声が起こった。大隊本部も、至急態勢で所命の位置につかねばならない。横一線陣地となったため、本部と各隊との連絡がとれない。敵情の把握もできない。隘路付近から激しい戦車砲の射撃音が聞こえてくる。戦車砲は、平射のため発射音に続いてすぐに着弾音がある。キャタピラの響きも聞かれる。派遣した戦車攻撃隊の報告によると、中型戦車が五輛くらいいるという。第十中隊主力が布陣している三九二高地付近からは、しきりに迫撃砲の炸裂音が聞かれる。迫撃砲というのは、筒から花火を打

各隊に対し、それぞれ占拠すべき地点を命じた。しかし、大隊長と各隊間に無線連絡がある訳でなく、命令は総て伝令兵の駆け足によって伝えられるのが実態である。命令が最先頭の尖兵せんへい小隊に届くか届かないうちに、双方の衝突が起こっている。当方は十分な準備の時間もなく戦闘に突入するはめになった。しかも、悪いことに、地形の関係で敵の攻撃に対し

ち上げるのと同じ仕組みで、筒の中に魚雷形をした砲弾を上から落とし込む。すると砲弾の持っている火薬の力で飛んでいくもので、弾道は山なりの大きな弧を描いて飛ぶ。だから、発射音がしてから暫くして着弾炸裂するものである。砲弾の先端についている信管が、土や木などに当たると砲弾は瞬時に破裂して、何十という細い破片となって飛び散りあたりの人馬を殺傷する。

敵歩兵の装備は、自動小銃が主であり銃は非常に軽く携帯に便で、発射の際は二十発位の弾丸が連続して出る。射撃距離はあまり飛ばないが、近接戦闘やジャングル内での戦闘には、強大な威力を発揮する。

これに比べて我が方の兵器は、歩兵は全員三八式歩兵銃、これは長さが一・五メートル位で、重さも相当重く、三百メートル位先のものを狙撃するのに好都合である。弾丸も一度に五発装填し、一発ずつ発射するもので、近接戦闘には不向きである。そのほか、小隊には、軽機関銃が三、擲弾筒（射程が五百メートル位の軽迫撃砲）が三つある。何れも日本軍の装備は、広い満州の曠野を想定したものであり、ジャングル戦には不適である。

さて、戦闘の方は、朝から友軍陣地の各所で激しい銃砲声が止み間なく続いているが戦況は不明のままである。大隊には、各隊へ増強すべき予備兵力もなく、各隊との連絡がとれない以上、戦闘指導の方法もない。長い一日が終って夕闇が迫ったころ、さしも激しかった

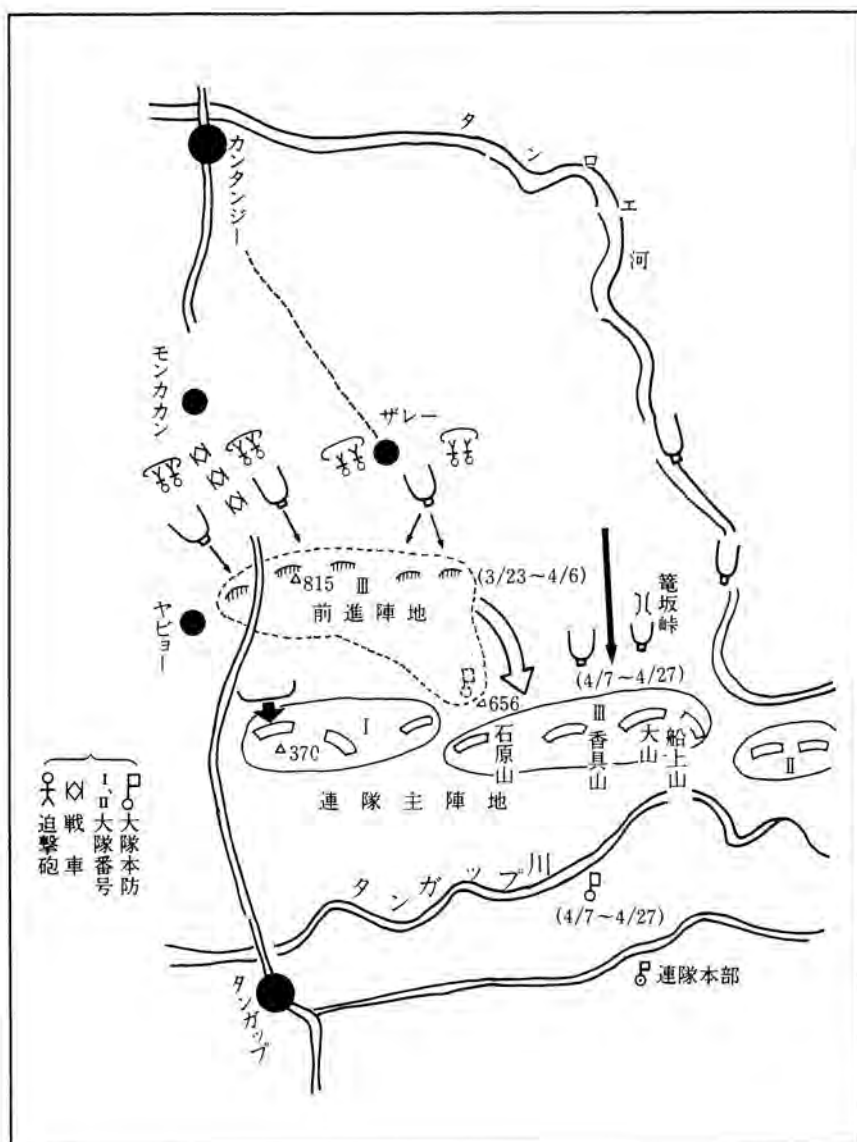
た銃砲声もはたと止んで、戦線は一日の激戦がうそのように静まってきた。友軍が撤退したか、それとも敵が撤退したか。多分に前者の公算が強い。早速、当初各隊を配備した所へ連絡を出して見たが、一向に友軍の姿はない。軍道隘路を突破した敵の陣地が、当初の戦線のはるか後方まで進んでいる。

大隊長は、副官の私と若干の兵を、残存が予想される大隊内の兵の連絡掌握のために、後に遺して、急拠タンロエ河防衛のために退^{きか}つていった。

私は、後に残っているかも知れない友軍を探して收容し、併せて敵の後方攪^{かくらん}乱をするよう任務を受け、八名の兵を指揮して後に残ることになった。地図と星空をたよりに一晩中陣地の跡を探したが、何れも激しい戦闘の跡ばかりで、一人の友軍をも掌握することができなかった。戦車、迫撃砲、火焰^{かえん}弾等を持った圧倒的優勢な敵との遭遇で、実にうまく戦線を離脱して退却したものと感心したものである。途中、敵の迫撃砲陣地があつたので、後方から陣地に近づいて軽機関銃の乱射を浴びせる等、一応の任務を果して、次の夜敵中を突破してタンロエ河の防衛線に無事帰着した。

(5) 副官としての戦闘 — 防禦戦 —

大隊長は、連隊命令によって、タンロエ河の南側に前進陣地を確保し、敵の南進を極力



阻止すべく、私が帰陣した時には既に配備を完了していた。連隊の作戦計画は、第一大隊を以て、軍道沿いのタンガツプ防衛の主陣地を確保し、第三大隊を第一大隊の前面に置き、成るべく敵の南進を抑止し、主陣地強化の時間を得るようにすることであった。

前進陣地の配備は、左第十一中隊、中第十中隊、右は配属の輜重隊とした。ここでの戦闘は、特に十一中隊正面の軍道に隣接した八一五高地付近が最も激烈であった。敵は、夜明けと共に、五、六機の戦闘機を百メートルから二百メートルの超低空で飛ばし、目標物を発見すると、両翼に抱えている二発の爆弾を投下した後、くり返し旋回して来て機銃の掃射をくり返す。また、我が陣地とおぼしき所の総てに迫撃砲の連射を定時的に行なつて来る。迫撃砲弾の落下位置は、絶えず飛行機で観測し誘導しているので着弾は正確である。敵が攻撃を仕掛けて来る時は、必ず二乃至三十分位猛烈な砲爆撃を実施した後、歩兵がそれに随伴して自動小銃を乱射しながら陣地に迫ってくる。

兵力においても、火力や機動力においても比較にならないほど劣勢な我が方の戦闘法は、敵の砲爆撃中は、徹底して塹壕の底で小さくなっている。砲撃が終つて敵の歩兵が攻撃をして来た時は、初めは絶対に応射しないで、極く近距離に接近するまで我慢をして待つ。敵が眼前五十メートル乃至三十メートルになった時、始めて一斉射撃を浴びせて撃退する。なおも接近する時は、手榴弾攻撃を以てこれに応ずる。これ以外に陣地を守る方法

は無い。また、夜間になれば、非戦闘の正面隊や予備隊の中から斬込隊きりこみを組織して、敵後方の迫撃砲陣地や、糧秣りようまつ弾薬の集積所を強襲する。

大隊副官の陣地戦における主な任務は、直接に戦闘を指揮するのではなく、常に大隊長の側近にあつて、大隊長の戦闘指揮を補佐するにある。大隊長の戦闘指揮の基礎となるのは、常に正しい敵状の把握と、部下諸隊の実状を知悉ちしつすることであり、それによつて適時適切に指示命令を発して、各隊を区署し、有効な戦闘を遂行することに在る。従つて副官は、一、敵情地形等について部下諸隊から知り得た情報を正しく掌握し、また自ら踏査する等の方法を以てなるべく正確詳細に大隊長に報告すること、二、部下諸隊の実状、すなわち戦力、志気等について正しく判断して報告すること、三、大隊長の命令、指示を適確迅速に伝達すること、四、部下諸隊に弾薬や糧秣を遅滞なく補給すること、五、連隊、隣接諸隊と密接に連絡をとることである。

毎日、日没になつて昼間の激しかった戦闘が一段落すると、本部で炊さんして置いた握り飯を持つて、昼間の戦闘が激しかった地区から順に第一線陣地を訪れる。暗闇の中で前線の陣地を捜し出すのは大変に困難なことである。予め地図で記憶しておいた地形に従つて、陣地までの距離を勘案しながら歩く。一般に陣地は、攻めるに難く、守るに易い峻險の地に設けることが多い。守備の兵等は、常に神経をとがらしているので、下手に近づけ

ば、味方から射たれかねない。足音を殺して陣地とおぼしき山に近づく。「大山、大山」低い声で合言葉を発する。返答の無い時には、そこら一帯を捜す。「蒜山」ひるせんの合言葉が返つて来た時には、やれやれ、やっと着いたかと安堵する。早速、守備隊の長に会い、日中の戦闘の様子、特に敵の行動、砲の位置や数、敵の企図についての意見、味方の損耗、残弾の量、明日の戦闘についての見通し等詳細に聴取し、戦傷者を連れて、次々と陣地をまわつて帰る。各陣地を一巡して帰るのに概ね前半夜が費やされる。

本部に帰つて来ると、早速知り得た情報を詳細に大隊長に報告する。大隊長は報告に基づいて、翌日の敵の攻撃企図を想定する。次いで我が方の戦闘要領を決定し、必要な陣地配備の変更や予備隊の使用について決定する。大隊副官は、それによって、大隊命令の原案を作製し大隊長に提出する。命令が決定すると、それを守備隊数だけ書き写して、伝達のため各陣地に向け出発する。出発に当っては治療の終った負傷者を引率し、補充の弾薬を携行して前半夜と同様、順々に各陣地を巡つて命令を伝達し、激励して歩く。これで夜もほとんど明けて来る。

本部に帰ると、大隊の戦闘概要、戦闘指導の内容等を整理し、連隊長に報告書を作製して、連隊本部との連絡に出掛ける。従つて、副官は、戦闘間は毎晩徹夜の仕事である。睡眠は、昼間手空きの時壕の底で仮眠をとる程度である。

大隊本部の位置は、通常第一線陣地の、扇の要に当る位置で、情報の授受に便利な場所を選定する。本部といえども陣地の一部なので、当然、山頂もしくは山腹に壕を掘り、その中で起居用務を行う。時折、迫撃砲の砲撃を受けたり、戦闘機からの銃爆撃を受けることがある。迫撃砲の砲撃を受けた時、ヒュル、ヒュル、ヒュルという音が聞こえた時は砲弾が頭上を通過する音なので安心してよい。砲弾は後方で炸裂するだけである。小銃や機関銃の射撃を受けたときも同様である。ピューン、ピューンという弾丸の音は安心してよい。これがバシッバシッという音になると至近弾で要注意である。前線陣地を巡るときは常に敵の攻撃を想定して歩く。右から攻撃を受けたらあの岩陰に、左から攻撃されたらこの凹みにといった具合に、絶えず足もとの地形地物と四囲の状況に注意しながら歩くのである。

前線での思考は、実に単純明快である。「如何にして死なないようにするか。如何にして任務を遂行するか。」ただそれだけである。お金がないといつて苦労することはない。上司からまたまわりの人からよく思われたいといった心配もない。食べ物がない時は皆一緒にないのであり、衣服がよごれているから破けているからといつても別に気にすることもない。住いについても、みんなが同じように六尺の蛸壺が我が住居である。前線は、気楽といえば実に気楽な所でもある。

ある日、ザレー正面陣地へ連絡に行つた時のことである。こちらの行動が敵の監視哨に発見されたらしく、部落に陣地を敷いていた迫撃砲の集中射撃を受けた。陣地の周辺は、五、六十発ばかりの砲弾が一時に着弾して、すざましい炸裂音に包まれた。みんなは自分の壕の中に頭をひっこめていたのだが、私には壕がない。止むなく浅い連絡用の溝の中に伏せて、砲撃の終るのを待った。迫撃砲の砲弾は、着弾の瞬間に破裂して細い破片を十メートル四方に飛び散らす。木に当たった弾丸は、そこで破裂して破片の雨を降らす。まさに修羅場である。砲撃が終わつてみんなが顔をあげ安否を確かめると、幸に戦死者なし。ただし負傷者一名、壕の底にうずくまっていた小久保上等兵が、破片で背をやられたのである。溝で横たわっている者は、蛸壺にいる者の何倍も危険度が高いはずであるが、前者は何とも無くて、後者が傷ついた。所詮、戦場での「生き死に」は、運命のなすところであろうと思つた。

(6) タンガップ主陣地の戦闘

四月の初め、我が前進陣地を突破した敵は、軍道沿いに三七〇高地に殺到して来た。この高地の守備隊は、第一大隊の古南隊の三十三名であつた。同地はタンガップ平地の天王山として、彼我の攻防も類を見ないほど激しいものであつた。連日連夜にわたる猛烈な空

爆、戦車砲、迫撃砲、二十五封度砲の間断なき砲撃、英印軍歩兵の肉迫攻撃、いったんは陣地を奪われ、再びそれを奪い返す等、死闘三日に及び、遂に我が方二十六名の戦死、七名の重傷、全員の死傷により止むなく陣地を明け渡すことになった。

三七〇高地陥落後敵は南下を中止し、攻撃の重点を、わが第三大隊が守備する中第一線の石原山から船上山陣地方面に移し、一部を以てタンロエ河谷の第二大隊正面を攻撃して来た。ここでの約二十日間にわたる戦闘は、地形が錯綜さくそうしているため、敵の戦車の使用が不能であり、専ら双方の歩兵による戦闘を中心に展開された。船上山陣地では、一本の稜線をはさんで双方が僅か数十メートルで対陣するといった具合であった。

ここ主陣地での戦闘では、死傷者数が以前にも増してふえて来て、毎日その報告を受ける度に心が痛んだ。特に内地出発以来、第十一中隊一小隊の私の所属であった下士官や兵の名を聞く度に、後に残された父母妻子の嘆く姿に想いが致され、何ともかわいそうで仕方がなかった。

(7) 戦場における戦闘観

毎日毎日、戦死者戦傷者の報告が来る。彼等は一体どんな想いで戦い、どんな想いで死んで行ったのか。これは彼等だけの問題ではない。毎日のように砲爆撃を受け、また敵の

襲撃を想定しながら前線を歩き廻っている自分も、いつ何時彼等の仲間入りをするかも知れないのである。

一体、何の為に命までも投げ出して戦うのか。今この戦場で、本部の作戦指導の根幹をなすものは、「どうして味方の損害を少なくして、しかも敵をたくさんやつつけるか」ということに終始している。第一線では「どうして、殺されるより先に相手を殺すか」で血眼ちまなこになっている。敵、味方のお互いが、自分の持つている物量、精神面の総てを動員して相手を殺そうとしているのだ。これは戦場では当然のことである。いや、戦場ではこれしか他には何も無い。「殺されないよう用心して、相手を殺す。」だけが戦場の掟おきてである。

しかし、私たちが対峙たいじしている相手の英印の兵士は、完全に私たちとは無関係な連中であって、個人的にも人間的にも何等憎悪の対象ではない。互いに知らない者同志、関係のない者同志を、殺し合いの場で激しく衝突させているもの、すなわち「戦争」は、国と国の問題である。私や私の部下は、日本軍のひとりとして、英軍のひとりひとりをやつつけようとして、「戦っている」訳だ。

「国のために相手を殺し、国のために殺される」といつても、まことに漠然としていてピンと来ない。「国」というものが具体的につかめない。それならよく言われているように、「天皇陛下の御為に」と考えてみてもこれもよくわからない。私はかつて学生のころ

に、東京で天皇陛下の査閲があつて、宮城前で分列行進をした時天皇陛下を見た事がある。天皇陛下は「ねこ背であつた。」という印象はあるが、それ以上何の感慨もない。まして私の部下の兵たちは、陛下について、話は聞いたことはあつても見た者もない。それが「陛下のため」と言つても、「国のため」というより一層漠然としてつかみ所がない。

いろいろに思い迷つた挙げ句に到達した結論は、「今、私たちは、日本民族のためわが民族のために命まで投げ出して戦っているのだ。」ということであつた。誰にも親や伯父叔母がいる。兄弟や姉妹がある。可愛い妻子がいる。今、この戦争で勝たなかつたら、我々日本人が路頭に迷ふことになる。この戦争に勝てば、次の世代、次の次の世代の者たちが、この地球上で繁栄して行けるのだ。「今、命を的にして戦っているのは、親子兄弟すなわち日本民族のため」と考えて、少しは納得した。

しかし、今は理くつはどうあれ、「生きねばならない。殺さねばならない」。ライオンの檻の中に投げ込まれた人間のように、先ず当面、眼前に迫つて来る牙をむいた相手を全力を挙げて倒す外に道はない。そのため、当方が傷つき命を落とすような事があれば、それは「不運」とあきらめるより外にないのだと。

(8) 現地ビルマ人の協力

タンガップの戦闘で、特筆すべき事の 하나가、現地ビルマ人の犠牲的な協力を受けたことである。食糧の確保や炊さんの手伝い、敵情の連絡、友軍の誘導、負傷者の後送等、終始劣勢であつた我が日本軍に対し、危険をも顧みず協力奉仕してくれた事については、ただただ感謝の外はない。戦闘間にビルマ人に助けられた事例として、私の元部下であつた大坪健治君（鳥取県智頭町出身）が、連隊史「渦まぐラッタン」に寄稿したものを次に掲げて、その例とする。

私は、第三大隊の作業小隊第四分隊長として作戦に参加。三月二十二日タンガップ郡チェツカイン村付近の戦闘で、自動小銃により左大腿部に盲貫銃創もうかんを受けた。当時われわれは、タンガップ北方アン付近の戦闘より転進中であつた。チェツカイン付近の戦闘は激烈で、機械化された英軍の前にはどうすることもできなかった。負傷者三人と共に漸く友軍陣地へたどり着いた。原隊の第十一中隊の警備する陣地であつた。そこには、牛車とともに軍に協力するビルマ住民の一団がいた。それはタンガップ付近の農村の住民のようだ。歩くことのできない自分を何とか後送したいと衛生兵も考えていた。たまに一人のビルマ人が私の前に進み出た。それが、タンガップ付近の警備中、宣撫班せんぷとして農村を巡回していたときの農夫で顔を覚えていた。彼は私にどうしたのかと聞く。

いろいろ話していると、彼は牛車で後方まで連れて行ってやると言うのである。他の負傷者は何とか歩くことができるが、歩けないのは自分だけである。何とか軍医のいる後方まで行きたいのだが、負傷者につき添う衛生兵もない現状である。

私は、この農夫を信頼して敵中を突破することに決めた。空には戦闘機が四六時中飛んでいる。日暮れを待って、銃を片手にわらを積んだ牛車に乗った。夜空の星を眺めながら、遠く近くに迫撃砲の炸裂する音の中を、牛車は何時間か歩き続けた。ようやく、農夫の部落の近くまで下がってきた。山の木陰に牛車を隠して、農夫は一人で部落を偵察して来た。昼間はインド軍の斥候せうこうが入っていたという。私は、もうこれまでかと手榴弾を握っていた。農夫がどうしても家まで連れて行くというので、彼の言葉を信じて、夜の闇にまぎれて家の物置にもぐり込んだ。不安な一夜を明かし、彼の近づく音にも警戒しながら朝を迎えた。農夫が食事を持って来た。何日も飯を食ってないので、自分は、生き返るほどのビルマ料理である。が、彼を疑うわけではないが、なぜか食物が喉を通らない。彼は、家族も近づけないから心配するなという。二日たった。負傷か所が段々大きくなり痛みもひどくなった。

夕方、興奮した顔で入って来た農夫は、やっと日本軍のいる所がわかったという。アラカンの山の中に、赤十字のマークを付けた兵隊がいるという。これから何とかして、

マスター（兵隊への呼称）をそこまで連れて行くという。彼を信じて、また牛車に乗った。遠くで夜間爆撃の音がしている。アラカン山系への途中で、敵の戦車隊に会う。やつとの思いで、夜明け前にある場所に着いた。そこは、第四野戦病院であった。動けない体を農夫と衛生兵とで、谷の中腹の病舎まで連れていつてくれた。

別離を惜しむ彼に、何かを与えたいと思うのだが、持っているものは銃、剣、手榴弾一箇だ。泣いて無事を祈ってくれる農夫、振り返り振り返り頂上へ登って行った彼の後姿は神のようだった。

当時、相当な歳であった彼。今ごろどうしているだろうか。非常に暖かい心の持ち主であった。命の恩人ビルマ農夫の姿は、終生私の脳裏から離れることはない。

七、敵中突破の転進作戦

(1) 昭和二十年のビルマの戦況

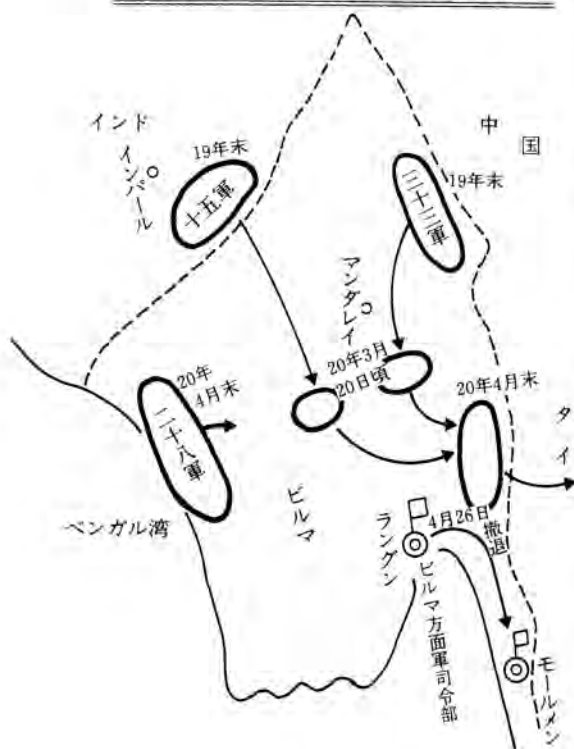
サイゴン（ホーチミン市）に本拠を置く南方軍の隷下（れいげ）の一つに、ビルマ方面軍があつて、ビルマ全土に展開する日本軍を統轄（とうかつ）していた。ビルマ方面軍は、東北部の中国国境線に展

開していた第三十三軍、中部からインドのインパールに進攻し、大敗を喫して後退した第十五軍、それに、ビルマ戦線の左翼を支えるためベンガル湾岸に展開した、私たちの第二十八軍の三軍団によって編成されていた。

昭和十九年末、第十五軍のインパール敗退を機として、英軍の北東及び北西部からの一斉攻撃が激しくなり、ついに昭和二十年の三月頃には、中部ビルマの要衝マンダレイも敵の手に落ち、三十三、十五の両軍は必死の抵抗を続けつつ逐次後退するに至った。

四月下旬、中部ビルマまで後退した両軍は、敵の重圧に堪え切れなくなり、ついにビルマとタイの国境山岳地帯に退き、ラングンにあった方面軍司令部も、四月二十六日には首都を放棄

昭和20年ビルマ方面軍撤退状況



し南東部のモールメンに撤退した。ビルマ中央部を席捲^{けん}占領された方面軍にとって、第二十八軍の左翼防衛は、全く意味をなさなくなるところかこの軍は西部ビルマのベンガル湾岸に孤立するところとなった。

(2) 敵中突破の邁作戦

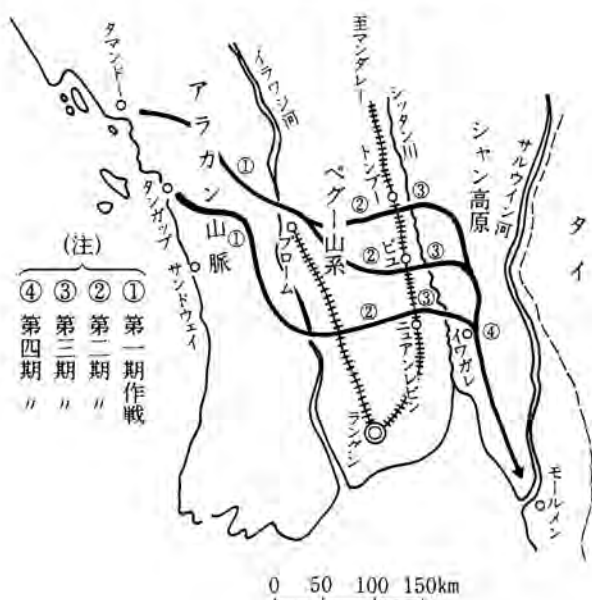
ビルマ方面軍は、首都ラングンを放棄して東南国境モールメン地区に後退するに当って、



ベンガル湾岸でアラカン山脈の天険^{けん}によって戦闘を続けている「第二十八軍」に対し、「イラワジ、シッタ

ン平地の敵中を突破して、タイ国境に近いモールメン地区に転進せよ」と命令を下した。時は、昭和二十年四月下旬、ビルマ全土にこれから雨季が始まろうとす

邁 作 戦 図



点に集結するまでの作戦を、邁第二期作戦とした。

邁第三期作戦は、ビルマ国の主要鉄道と幹線道路である「マンダレーーラングン」の線を突破し、シタン平地をつき切って、東部国境のシタン高原に着くまでの作戦とした。

この作戦は、ビルマの中でも最も強力な敵の配備の中を突破することが予想され、最も困

る時である。

二十八軍は、このビルマ横断の敵中突破作戦を「邁^{まい}作戦」と呼ぶこととした。そして、作戦を四期に分けて、先ず当面する敵との離脱を図り、アラカンの山険を越え、マンダレー方面から南下した敵が占拠するイラワジ河平地を突破し、中央の高原台地であるペグー山系にたどりつくまでの作戦を、邁第一期作戦とした。

続いて、人跡^{まれ}稀な、大竹林のペグー山系を横断し、シタン平地突破地

難な作戦であると思われた。また、シッタン河の渡河も折から雨季の最盛期に当るため相当の困難が予想された。

そして、シャン高原に到着後、これを南下して、所命の地区に至るまでを、邁第四期作戦とすることにした。

第一期作戦は、乾季末期、雨季入り早々の季節で、イラワジ河沿いに南下した敵の戦車および支援航空機の活動が活発で、特にタマンドー方面から撤退した五十四師団主力の、イラワジ渡河の戦闘は、さながら蜂の巣の中を突き切るようなすさまじいものであった。

ペグー山中を集結地に向かった第二期作戦は、折から本格的な雨季を迎え、泥濘と食糧不足に悩まされ、体力の限界を越えて落伍する者が続出するという悲惨な戦闘であった。

続く第三期作戦は、敵が迎撃の手はずを万全に整えていたシッタン平地の突破と、濁流滔々、河幅二百メートルのシッタン河を、竹筏に身を托して命からがらに渡河するというもので、邁作戦中で最も困難でかつ潰滅的な打撃を受けた作戦であった。

第四期作戦は、僅かに残った兵器や装具の一切をシッタン河で流し、九死に一生を得て対岸に泳ぎ着いた者たちが、三々五々と敗残の姿で目的地目指して行進した作戦である。

第四期作戦の中途の八月二十日過ぎ、日本敗戦の報が伝えられ体力も氣力も衰え果てた行進となった。

私が所属した隊の損耗表 () は割合

	生 存 者	戦 死 者	生死不明者
第54師団	3,188(0.22)	5,396(0.37)	5,773(0.41)
第121連隊	1,156(0.36)	852(0.26)	1,214(0.38)
第3大隊	195(0.23)	270(0.32)	360(0.43)
第11中隊	67(0.24)	71(0.26)	136(0.50)

本次のビルマ戦における、私の所属した部隊の損耗状況は、上掲の通りである。

戦死者の大部分は、ベンガル湾岸で、上陸して来た英印軍との戦闘によるものである。

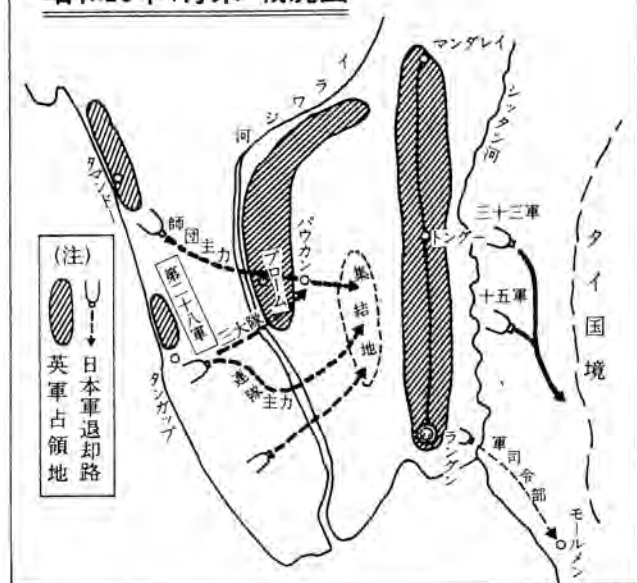
生死不明者は、第二期作戦で体力消耗の果てに落伍した者、第三期作戦のシッタタン河を渡河する際、流れ死んだ者がその大部分である。そして、その数は全組織の四割乃至五割にも及んでいる。

八、混戦の邁第一期作戦

(1) 作戦の概要

昭和二十年四月、中部ビルマのマンダレー方面から南進を開始した敵は、我が方の第十五軍や第三十三軍の抵抗を排除して着々と首都ラングンの奪回を図り、下旬には同市の郊外に達する勢いであった。また別働の有力部隊をイワラジ河沿いに南下させ、同地域の軍事上の要衝プロームを陥し^{おと}入れた。

昭和20年4月末 戦況図



助に送り、私の所属する第三大隊を師団の直轄として現地に残し、第一大隊を引き連れて第二十八軍の直轄となるべく後退、転進を開始した。

第三大隊は、連隊主力の転進に伴い、戦線を離脱してアラカン軍道入口に配備を変更し

四月十五日、方面軍は、退路を断たれて孤立した第二十八軍に対し「当面の海岸における戦闘を放棄して、後方の敵中を突破し取りあえずペグー山系内に集結する」よう電命して来た。

姫路、岡山の連隊を中心に、北海岸で戦闘をしていた師団主力は、直ちに反転してアラカン山脈を越え、後方の敵との交戦に入ったが、南部海岸で戦闘を展開していた我が鳥取連隊に転進命令が下つたのは、四月二十九日であった。連隊は三つ大隊のうち、第二大隊をプローム方面の師団主力の戦闘の援

主力の転進援護に当たった。第三大隊に師団から「速やかに現配備を撤し、パウカン西方高地に到り、師団主力のパウカン集結を援護すべし。」との命令が下ったのは、五月十一日である。

以後の第三大隊の行動概要は次のようであつた。

大隊は直ちに転進準備にとりかかり、五月十二日夜、折から雨季入りのスコールにうたれながら力戦奮闘、たくさんの戦友の眠るタンガツプの戦場を後にして、アラカン越えの行軍に入った。五月二十日、軽微な敵の妨害を排除し、民船を利用してイラワジを渡河したが、途中ブROOM街道の横断に際して十数輜からなる敵戦車の攻撃を受け、大隊が一時四散するという状況になった。

三十一日漸くにしてパウカン西方高地に到着、直ちに陣地を占領して、ブROOM方面から攻撃して来る敵と戦闘を交えることになった。そして折から、ブROOM北方でイワラジ河を渡河し敵中を突破して、パウカンに集結する師団主力援護の任務を完全に果たすことができた。

ベンガルの湾岸を出発して、パウカンに集結するまでの作戦を「邁第一期作戦」という。

(2) 転進への出発

転進作戦とは、一応その名はよいが、つまるところ「退却作戦」のことである。しかし、この場合は敵に追われての退却ではなく、既に敵が占拠しているイラワジ、シッタンの両大河並びにその周辺の平地を突破しなければならぬ。そして時はあたたかも雨季の最盛期に直面している。前進して行く路は総てが未知の所、大隊にはわずかに不完全な二十五万分の一の地図が一部備わっているだけである。

副官としての重要な仕事の一つは、新しい作戦地に当面する毎に、配下の各隊長にこの地図を五万分の一の地図に拡大して配布することである。大隊の進路外で不要になった地図の裏に、縦横の罫を引いて、概ね五枚位の拡大図を作る。おかげで私の脳裏には、戦鬪地の地勢がすっかり焼き付けられ、邁作戦を通して随分と役に立った。

転進作戦の出発に当たって先ず考えたことは、作戦行程が直距離にして六百キロメートル、作戦行動をしながら踏破しなければならぬ距離は千キロにも及ぶということ。果してそれをやり遂げる体力があるかということである。負けん気だけはあるが、体力となるといささか自信がない。先ず将校用の服装を一切捨てて、靴も服も下着も脚絆もすべて丈夫な兵士用のそれに替える。装具は成るべく軽くする。携行するものは、下着の上一揃い、軍刀、拳銃、双眼鏡、それに命より大切な地図類の一切。兵隊が命の次に大切にしている、鉄帽、も私は捨てることにした。鉄帽は、砲弾の破片が当たっても、また斜めから小銃弾が

当つても差し支^{つか}えなく頭を護つてくれるように作られている。ただ重いのが難である。銃弾や破片が頭を直撃したら、その時は不運とあきらめることにして、体力を維持するため鉄帽を捨てるという訳だ。ある時、前線の中隊長から「貴様は、前線に出ないからそんな呑^{のん}気なことができるのだ。」と厭^{いや}味を言われたことがある。それも一理だ。しかし「自分としても考えた末のやり方なのだ。」と密かに思つたことである。

(3) 戦は勢なり

中国の古い兵法書「孫^{そん}子」の中に「戦は勢なり」という名言がある。勝ち戦の時の兵は平素自分の持てる力以上の力を發揮して勇敢に戦う。この場合、仮に戦死するようなことがあつたとしても、その兵士は勇者として丁重に遺体を收容され、遺骨は名譽の戦死者として遺族に渡される。また負傷した場合でも、直ちに後方に收容され、野戦病院で名譽ある戦傷者として遇される。

しかし、これが一転して退却戦となれば、事情は逆になる。部隊は集団となつて先を急ぐ。従つて戦死者は大概の場合、止むを得ないこととしてその場に放置される。負傷した場合は更に残酷である。部隊と行動を共にする事ができなくなり、後方に残置される。傷者のとる運命は、死か、さもなくば捕虜である。勝ち戦の場合が、サバンナの肉食獣の行

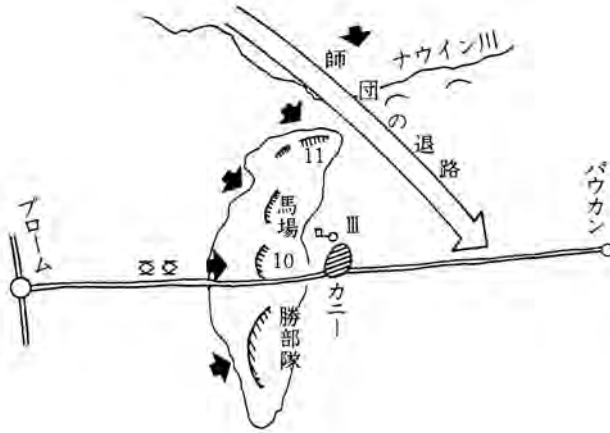
動であるとするれば、負け戦の場合は、草食獣の立場となるものである。

五月二十日夜、徴発した大小の民船に分乗してイラワジ河を渡った大隊は、河岸の草むらの中で一日留まって諸準備を整え、二十一日夜一挙にプローム軍道を越え、ペグー山麓に着くことにして、一斉に行動を開始した。しかし暗夜と降り続いた雨のために田圃一面はぬかるみ、前進意の如くならず、軍道を越えるころには白々と夜が明け初めて来た。軍道を越えて約二キロ、山麓まで未だ二キロメートルはあろうかと思われる地点で、敵の偵察機に見えられてしまった。止むなく付近の集落に入って遮蔽し、取り敢えず朝食の準備をすることにした。

そして、およそ一時間も経ったかと思われるころ、東の集落の方向からかすかなエンジンの音が響き出したかと思うと、一キロほど前方に十数輦の戦車が散開して、この集落に向かつて来るのが見えだした。集落内に散らばって食事の準備をしていた各隊に、非常配置の命令を出すか出さない内に、敵戦車は一斉に砲門を開き攻撃して来た。不意を襲われた兵たちは、命令等聞かばこそ、自分の身の廻りのものをかき集めて、算を乱して山麓目指して走り出した。幸いにこの場合は、大隊砲と配属の野砲隊の応戦で撃退することができたが、逃げ散った兵の掌握には、その後九二日を要することになった。これも退却戦なるが故の志気の低下のなせるところである。

(4) パウカンの戦闘

五月三十一日、若干の遅滞はあったが、無事パウカン西方高地に到着し、勝部隊長の指揮に入り、師団集結地パウカンに対する敵のプローム方面からの攻撃を阻止する任務についた。



(任務)

第三大隊は、勝部隊長（砲兵連隊長）の指揮に入り、右地区隊となり、軍道以北、ナウイン川までの間を占領し、ペグー方面よりする敵の攻撃を阻止し、師団の集結を援護すべし。

(大隊の配備)

右第一線 水島中尉 第十一中隊（一小隊欠）

中第一線 馬場少尉 第十中隊の一小隊

左第一線 中村中尉 第十中隊（一小隊欠）

直轄 作業隊 右側背の警戒

大隊砲 カニ部落に位置し、随時戦闘支援

予備隊 作業小隊の二分隊 第十中隊の一分隊

大隊本部 カニー部落の北端に位置す

各隊は、それぞれの配備に従って、錯雑した地形の中で要点高台を占めて、各分隊毎に配備し、蛸壺陣地を構築した。高台の広さは、大きいもので直径が三十メートル位、高さは十五メートル前後で、それぞれの高台は細い尾根で繋がっている複雑な地形であった。

敵は、左第一線正面の軍道方面から戦車や装甲車を以て攻撃をしかける一方、右第一線正面へは、大砲の猛撃のあと、陣地一面に発煙弾を撃ち込み眼つぶしをしておいて、歩兵が自動小銃を乱射しながら高台の陣地上に攻めあがるといふ戦闘が屢々行われた。我が方は、敵歩兵の突入までは息をひそめて、壕の底にうずくまっていた、敵が陣内に侵入すると穴の中から射撃で反撃し、これを撃退する。ひどい時には、直径が僅か二十メートルの陣内に敵の遺体が二つも三つもあることがある。遺体は処置のしようが無いので、夜暗を利用して谷底へ転がし落として仕末する。三、四日もすると屍体は腐乱して、何とも言いようのない悪臭が陣内に充満する。全く食事何もできなかったものではない。我が陣地から後退した敵は、すぐに隣の高台を占領して陣地を構築する。昼間は互に睨み合いの狙撃戦になる。だから昼間は壕の中に入ったままで一歩たりとも外に出ることができない。従って、食事は夜に入って、後方から運び込んだ玄米の握り飯を食うのが精一杯である。これに引

きかえ、敵の給与は豪勢なものである。毎日、定期的に超低空の飛行機が、弾薬や食料をパラシュートにつけて投下する。ごくまれに、風向きによって我が陣地近くに落ちることがある。その時は、みんなが「英軍給与」といつて喜ぶのである。投下食は、一食が二十センチ位の方形の缶詰で、中には、パン、チーズ、チョコレート、コーヒーそれにたばこ等が入った豪華なものである。

ある日の早朝、例によって各陣地の連絡を済ませて、本部に帰る途中のでき事である。入り組んだ台地の路を用心深く本部へ向かっている時、小さな尾根を越えたところであったりと若い英軍兵士に出会った。彼は丸腰でしかもった一人である。多分自分の陣地の周りを歩いていて路に迷ったものらしい。拳銃を突きつけて、難なく捕虜にしまった。彼は二十才前後で、ポケットには家族の写真やら恋人と思われる若い娘の写真を持っていた。連れて帰って部隊本部へ渡しておいたが、その後どうなったか知らない。転進作戦の最中の出来事なので、放たれて自軍陣地へ帰ったか、あるいは殺されてしまったであろうか。多分に後者の公算が大であつたろうが、個人的には遺恨も憎しみもない者が、戦争の名において虫けらのように抹消されてしまう。それが戦争というものだ。

九、白骨街道の邁第二期作戦

(1) 第三大隊の転進

軍命令に基^{もと}づいて、ペグー山系の東麓パウカンに辿^{たど}り着いた師団は、降りしきる連日連夜の豪雨の中を、ペグー山中の指定された集結位置に向かつて行動を開始した。ペグー山中は全山が竹林で、集落とてほとんどなく、雨とぬかるみ、そして飢餓と栄養失調との戦いであつた。私が「鳥取連隊史」に寄稿した文を掲げてその状況を見ることにする。

元第三大隊副官 小松正雄

六月十六日、師団主力がパウカンに集結を完了し、ペグー山系に入るべく南下を開始した。第三大隊は、師団輜^{しちよう}重兵百名を配属され、師団主力の糧秣^{りようまっ}調達を命ぜられたため、麻田主計少尉を長として先行せしめ、大隊主力は、十六日夜となるのを待つて防衛の配備を撤収^{てつしゆう}して、急拠^{きよ}師団に追及し、これが直轄となることとした。第十一中隊の水島隊は、戦線錯綜^{さくそう}し離脱に手間どつたため、後発隊として十七日未明に出発させた。豪雨泥濘の中、強行軍を以て翌十七日夜、パウカン南方約四十キロのレパンゴンで師団の指揮下に入ることができた。

この地で二日間の休止、全員民家から粃^{せう}を徴^{せう}発し、鉄帽に入れて棒切れで搗^ついて玄米にし、一人当たり二十日分の食糧を持つて山に入るようになった。これから先、人家皆無の竹林行軍に備えるためである。

二十日過ぎ、別行動をとっていた連隊本部から、連絡のため派遣された渡辺将校斥候が到着、久方振りに連隊や第一大隊の状況を聞き、懐しきで一杯であった。ここで、私たちと行動を共にしていた第二大隊の有光大尉、湯原軍医中尉（松江市出身・戦死）を原隊に復帰させることになり、互いに前途を案じつつ別れを惜んだ。これより大隊は、師団主力と共に乾季に仮設した軍道に沿って、集落一つない山中を、ピュー河上流まで百キロメートルの行軍に入った。

このころ、ビルマは雨期の最盛期であつて、昼夜にわたつて篠^{しの}つく雨が休みなく降り続く。雨の中を大部隊が行進するため、道は深いぬかるみとなり、膝^{ひざ}まで没する。一歩進んでははまり込んだ後足を力を込めて抜き出して前に出す。出発して三十分も経たぬ間に、服を通した雨は体の芯まで完全に濡^ぬらしてしまう。

背にした米の重みが肩にくい込む。小銃が鉛のように重い。朝八時に出発して、五十分歩いては、十分の休憩、夕方四時ころには宿営のための大休止に入る。一日頑張つて歩いてもその行程は僅か八キロから十キロ程度の難行軍である。大休止の命令があると、各分

隊は直ちに手分けをして宿営準備にとりかかる。竹を切つて柱を建て、割り竹を並べて床を作り、蔓で竹を結んで片屋根の屋根地を作る。そこへ広い葉っぱを捜して来て、順に並べて屋根とする。そして枯竹の表皮をはいで薪を作り、火を焚く。火が赤々と燃えるころには、山は既にまっ暗である。それから濡れた衣服を脱いで乾燥させる。そしてやつと夕食の準備に入る。食事は当初は二合宛であつた。もちろん副食等一切無いので、熱い飯に塩をふりかけて食べる。夕食が終わると、翌日の朝食を炊く。総ての作業が終わると夜も十二時を廻っている。後は、乾かした服を着て竹床の上にごろりと横になつて仮眠をとるのである。

翌朝はまた八時、雨の中の出発である。来る日も来る日も、このようなことの繰返しである。しかし、一週間もすると残りの米も目に見えて少なくなつて来る。仕方がないから、筍を刻んで一緒に炊いて腹の足しにする。日を経るに従つて筍の量が増え、半月も経つたころには、筍の中に御飯つぶの入つた食事となる。

三月以来の激戦につく激戦、戦闘間も多くても一日一食で明らかに栄養不足、それに五月に入つてからは連日の濡れ鼠、更に今度の泥濘の行軍で、栄養失調の上にマラリアまで発症し、体力も尽き果て立ち上がる気力も失つて、夜営地に残留する者、部隊から離れて落伍する者、手榴弾を抱いて自爆して果てる者等が日毎に多くなつて来た。

また、靴は、深いぬかるみのため底が離れて役に立たず、行軍の初期から全員が裸足^{はだし}のままである。一日の行軍が終るころには、足は「砂ずれ」のために大きく腫^はれあがる。超過労、栄養失調、マラリア、砂ずれ等々、常体の者は一人もいない。部隊は、日一日と地獄絵図に近づいて来る。七月四日、師団の各隊は、ようやくにして第一次集結地であるビュー川と軍道交叉点八三三高地付近に到着し、大休止に入った。

(2) 転進の苦渋^{くじゆう}

師団主力が、六月十五日パウカンを出発してペグー山系に入る邁第二期作戦に入ったので、我が大隊も半月に及ぶ師団集結援護の任務も終った。この間の戦闘も相当激しいものであった。私が大隊副官に就任するに際して私の後任となった小隊長の福田少尉も、ここで名誉の戦死を遂げた。気の毒の限りであった。

師団出発の翌日、私たちの三大隊は師団の後衛^{こうゑい}（後方を警備する隊）となつて、主力の足跡を伝つて出発した。二十三日いよいよペグーの山中に入るといふ所で「山中には集落もなく、食物は一切無いから食糧を十分用意して行け」という示達があつた。

ビルマの農民は、秋に収穫した時には、総てを粃^{もみ}のままで貯蔵しているので、民家の粃^{ちやうはつ}を徴発して鉄帽に入れて搗き粃殻をむいて米にするのである。一回に二合位ずつ、何回

も何回も搗いて、一人が概ね一斗五升（約二十二キロ）位の米を作る。私の米は、部下の兵隊に手分けをして作ってもらい、私はその間に、部落内を走り回っていた大きな豚を一頭つかまえた。そして焼肉を作ってみんなで賞味した。何しろ開戦以来のご馳走なので、みんな大喜びであった。私はその時、何かの役に立つかも知れないと思って、瓶に脂を溶かし込んで携行することにした。これが後で、命の恩人となるとは夢にも思わなかった。米は、私の体力を考えて、一斗だけ持つことにした。

ペグー山系は、日本の孟宗竹もうそうのような竹が一面に生え茂った山である。そして昼夜をかたぬ篠つく雨で、山中に筍が生えている。大部隊が行進した跡を伝って歩くのだから、ひどいぬかるみで、足が土の中に吸いつけられて思うように歩けない。右足を一步前に出しては、杖を使って後の左足をよいしょと抜いて前に出す。もちろん靴は半日ほど底がはがれて、以後は裸足はだしである。米の重みが肩にかかって行軍は一層難渋する。体の芯まで雨に濡れ、杖を頼りに黙々と足を交互に動かすだけである。

日が経つにつれて足に「砂擦れすず」が起こり出す。素足で土の中深く踏み込んで、またそれを引き抜く行動をくり返すと、足が砂で擦れて、午後になると膝ひざから下が大きく腫れてくる。特に足の甲などはばんばんに腫れむくんで、指で押さえれば中から水が出てきそうな感じになる。この時威力を発揮したのが例の豚の脂である。夜、大休止となつてみんな

が手分けをして竹の小屋を作る。そして火を燃やしたら、先ず第一に背囊はいのうから豚の脂の瓶をとり出して火にあぶる。脂が溶けて流れ出したら、掌てにとつて腫れ上つた足にいていねいに塗りつける。すると不思議にも翌朝までには、足は元通りに直っている。時には飯盒はんごうの蓋に脂をたらして筍をいためて食べたりもする。少しは栄養の補給に役立ったことだろう。毎日、このように豚の脂の御利益ごりやくによつて、何とかみんなと一緒にの行軍ができた。

連日、揮ふんどしまで濡れる豪雨と、膝まで没する泥濘でいねい悪路の行軍が一週間も二週間も続くと、兵等の体力も日増しに弱つていく。日に日に食糧も乏しくなり、三度三度の筍ご飯も、追々と米の量が減つて筍の量が多くなる。みんなが栄養失調になつて顔は土色となる。ひどくなると、両方の頬ほおや咽のどそれに手足が腫れて来て、歩くことも困難となる。体力の限界を越えて、ただ精神力だけで歩いて行く。衰弱した体にマラリアの発症でも加われば、発熱のためもう歩けなくなる。次々と落伍者が出てくる。夜営した小屋から動けなくなつて後に残りそのまま消息を断つ者、道端の木の蔭で行き倒れてしまう者、雨に打たれたまま道路にうずくまつて動こうとしない者、中には手榴弾を胸に抱きこんで自爆して果てる者もあれば、「お願いします。その拳銃で撃つて下さい。」と力なく哀願する者も出てくる。

このような状況の中でも、行軍は一日の猶予ゆうよもなく続いていく。倒れた者は、心ならずもそのまま置き去りである。敗け戦の悲情な現実である。息を引きとつてから半日もすれ

ば口、鼻そして眼からも蛆うじが湧いて、屍体を食べていく。集結地に近づくにつれて、行軍路の両側の死者の数が夥おびただしく増えてくる。衰弱の極きわみで今まさに事切れんとしている者、先刻死んで、顔のまわりを蛆がはい廻っている者、何日か経った屍体で既に骨の一部が現れ始めている者、まさに惨の極という言葉の通りである。誰言うとなく、この行軍路のことを「白骨街道、あるいは靖国街道」と呼ばれるようになった。

しかし、行軍を続ける兵等は、自分たちの隊の顔見知り以外の者に対しては、激励することもなく世話することもない。これ等を横目で見る位で、ただ黙々と歩き続ける。世話をしようにもどうしてやる事もできない。気休めに励まして見たところで、どうにもならない事をみんながよく知っているから。そして、今、目の前に倒れている彼等の姿が、明日の我が身になることを知っているから。

ある日、夜になって宿営の準備をしている時のことである。十メートルも離れていない隣の小屋から、突然一発の鋭い銃声がした。何事ならんと駆け寄って見ると、私の大隊へ配属になっていた通信隊の兵が、額ひたいから血を流してうずくまっている。どうしたのかと質たして見ると、小銃の先を額に当てて、右足の指で引き金を引いて自殺を図ったとのこと。しかし、危険を避けるのは人間の本能で、引き金を引くと同時に頭をのけぞらしたため、弾丸が額をかすめて通ったという訳だった。そこで、銃を取りあげ、茫然としてうずくまっ

ている兵の頬を二三発殴りつけてやった。ようやく我に帰った兵は、何事もなかったかのように他の戦友と一緒に宿営の作業にとりかかった。その翌日からは、またいつもの通り私たちの隊と一緒に行軍を続けて来た。人間は、「もうこれ以上は生きておられない。」と考えて自分で命を落そうとしても、それが失敗に帰した場合は再び生への元気が出るものらしい。

ペグー山系内における私たちの集結地は、ピュー川の上流地点の八三三高地付近であった。集結地に到着すると、師団から「竹筏いかだによる激流の渡河法」についての研究を命ぜられた。次の作戦で、シッタ河を渡河する際、舟は総て敵によって押収され、竹筏による以外の方法はないものと思われたからである。この地点でのピュー川の川幅は三十メートル、折からの雨季で、山系内の降雨を集めて濁流が猛烈な勢いで流れている。

連日、竹を切って色々に組み合せ、筏を作って水中で実験を繰り返す。山中から一人が持ち出せる竹は、直径が十五センチほどで、長さが三メートル位のもの三本が精一ぱいである。この一人当たりの竹をどのように組み合わせて筏を組んだら激流を渡り切れるかが、研究の主な点である。一人が三本の竹を使う法、二人で六本の竹を使う法、三人で九本を結束して使う法等いろいろに組み合わせて、実際に流れを渡る実験が進められた。前述のように、ほとんど全員が疲労困憊こんぱいの極にある時、急流に体をつけての研究は想像を絶する難

業であつた。

いろいろと苦心研究の結果、筏によるシツタン河渡河の方法は、次の要領によることが決定した。すなわち、ペグー山系を発する時、各人が二乃至三メートルの竹三本を携行する。また、それを結束するため、衣服を裂いて縄を作る。渡河に際しては、三本の竹を三角形に組んで筏を作り上に装具等を載せ、人は筏を押して泳いで渡るといふものであつた。

十、決死の邁第三期作戦

(1) 第三大隊の戦闘概要

ペグー山系中に集結した二十八軍は、七月二十日午後八時、六十キロメートルの展開正面から各隊一斉に発進し、敵が手ぐすねを引いて待ち構えているであろうマングレー街道を一挙に突破し、シッタンの激流を越えて、シャンの山系にたどり着くまでの作戦を、「邁第三期作戦」といい、本作戦中で最も困難かつ苛烈な作戦であつた。

この作戦で第三大隊がとつた行動の概要を、私は「鳥取綜合連隊史」に次のように寄稿している。

元第三大隊副官 小松正雄

七月十八日、シッタン平地出発点「一七五四高地」に到着した大隊は、直ちに成田将校斥候^{せこう}を軍道方面の進路偵察に派遣する一方、数組の斥候を今までの行軍して来た路に、遅留者收容のため派遣する。他の兵は、二十日の発進までの二日間を、筏用竹の準備、衣服を裂いて結束用の縄作り等実施すると共に、来る可き困難な作戦に備えて休養する。

突破に当たり、師団より受けた命令の要旨は次のようである。

一、当地出発は、七月二十日午後八時とする。

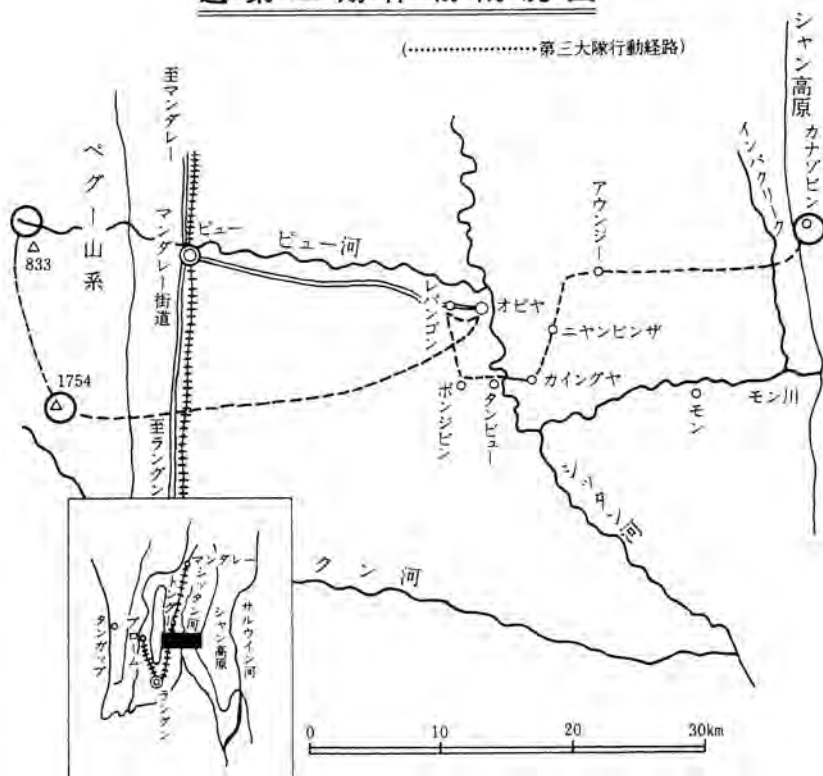
二、第三大隊は、中突破縦隊となり、師団司令部と行動を共にすべし。なお第十一中隊を尖兵^{せんへい}として差し出すべし。

三、マンダレー幹線突破後は、第三大隊は、師団の先遣隊となり、速かに「オピア」に到り、同地より二十三日までに渡河し、「モン」付近を占領して師団主力の渡河^{えん}を掩护^{ごうご}すべし。

山根大隊長は、久方振りにそろった第九中隊長坂上中尉、第十中隊長中村中尉、第十一中隊長水島中尉を集め、幹線道路の突破戦闘、シッタン河の渡河要領等について綿密な作戦計画を樹^たてる。小松副官は、ここでも、第三期作戦の全体をカバーする五万分の一の地

邁第三期作戰概況図

(.....第三大隊行動経路)



図を作成し、各中隊長に渡す。

七月二十日、夜に入ると同時に残して置いた米を全部炊飯して、夕食とする。

この時、私は部下各隊の將兵に次の指示をした。

一、平地に降りたら、粃がたぐさん手に入るであろうが、必ずお粥^かにして食べる。固いご飯を腹いっぱい食へば必ず下痢をして行動できなくなる。

二、砂糖板（ビルマ語でタニエー）が手に入る可能性があるが、決してそのまま

食てはいけない。必ず砂糖湯にして飲むこと。そのまま食した時は、アメンバー赤痢にかかる恐れがある。

栄養失調の極にある兵には、困難なことはよくわかつているが、数十日の空腹の後だけに、急に食物を腹いっぱい食べれば必ず下痢して、転進作戦中の落伍者となることを恐れたわけである。

いよいよ出発の時刻が来た。時に豪雨肺然として来り、「咫尺を弁ぜざる」の言葉通り、軍道を横断する企図を秘匿するには好都合であるが、急な山肌を大集団で山を下るのに難渋した。出発点から軍道まで十キロ、前半夜に軍道を横断して、夜明けまでに一挙にシッタンの河岸に到着する予定であったが、全将兵の渾身の力をふりしほつての前進にもかかわらず、軍道に差しかかったころには、既に十二時をはるかにこえていた。

しかし、軍道一帯には、敵の堅固な陣地あるいは強力な機甲部隊を予想していた我々にとって、銃弾の一発も受けることなく横断でき、幸先のよさに安堵の胸をなでおろした。が、困難はすぐその後から発生した。軍道を越えて、その後暗闇の中に広がるのは、一面の水である。荒起しをした水田、その間を縦横に走る水路、それらが一面に冠水して、広大な湖のようである。全くの暗中模索、気はあせれども体は進まず。増水した水路に足を踏み入れると、だんだん深みにはまってついに顔まで水につかり、あわてて引き返す。田

圃の中では土くれに足をとられて、ついに四つん這いになって進む。そのうちに夜明けが来て各隊の状況はと見れば、各隊苦心惨憺の前進の結果は、軍道から僅か三、四キロの地点である。

司令部は、兵員の疲労度を考慮し、取りあえず近くの集落に遮蔽して食事をすることを命じた。将兵は、昨夜来の困憊と、数ヶ月に及ぶ食糧不足から解放されて、糲を搜して炊事の準備にとりかかった。食事が終わると、直ちに出発を命ずる。果たせるかな、敵の飛行機が頭上を舞い始める。迫撃砲や二十五ポンド砲の猛烈な砲撃が部落に炸裂する。一斉に散開して、隠れるもの何一つない水田を一步でも早く、砲撃の射程の外へ逃れようと前進する。泥田の中の急進で足が引きつって腿がキリキリと痛む。それでも立ち止まる訳にはいかない。夕闇も近づくころ、ようやく砲火の射程から外れ、各隊は連絡をとり合つて態勢を立て直し、目的地オピアに向かつて前進する。

二十二日夕刻、ようやくにしてオピアの町はずれに到達する。オピアは、シタン河畔では最も大きな町で、マンダレー街道のピューから舗装道路でつながっている。大隊長は途中で、次々と掌握した数十名の兵を率いて、オピヤの町に入ろうとした時、突然、小銃機関銃の激しい射撃と共に迫撃砲の攻撃を受けた。応戦反撃したいのだが、何分周囲一面は冠水した水田で、水面から出ているのは、町に通ずる舗装道路一本だけである。身を隠

すものも、射撃を構える場所もない。しかも多勢に無勢で戦闘にならず、先ずは、道路沿いに三百メートルほど後方の「レパンゴン」の集落に入つて、部下各隊との連絡と、今後の戦闘、なかんづく渡河地点について検討することにした。

翌日昼前より、敵小型機による執拗な爆撃銃撃に加えて、オピアの町からの迫撃砲の攻撃が一段と激しくなってきた。この戦闘において、山根大隊長は、炸裂した迫撃砲弾によって全身二十数ヶ所に負傷し、戦闘指揮が不可能になった。また第三大隊本部付きの浅田主計少尉そのほか、たくさん死傷者を出した。

夜に入つても、第十一中隊長との連絡がとれず、第十中隊長もマラリアで発熱し、代わつて小松副官が指揮をとり、先ず大隊長以下負傷者を南方八百メートルの「ボンジピン」の寺院に移し、河畔に出て八方手をつくした結果、第九中隊、第十一中隊の一部との連絡に成功する。元気な者はなるべく早く渡河するよう指示する。

昼間は、飛行機が間断なく頭上を舞い、部落を爆撃し、河畔の草むらに機銃掃射をくり返し、迫撃砲も部落と草むらに砲撃をくり返す。一面の水田の中で身を隠すことができるのは、敵の照準する部落と水辺の草むらしかない。昼間は、河辺の水の中で頭だけ出して敵の攻撃を避け、夜になるを待つて連絡や渡河準備に走り廻る。第十一中隊および第十中隊の主力は既に渡河を決定したらしい。

二十四日夜、師団司令部は、工兵隊の努力により小舟を確保し、師団長以下を渡河させることを聞きつけたので、早速負傷している大隊長の舟便による渡河を願い出て、許可を受ける。早速、大隊長以下の負傷者を退避させていたポンジピンに引き返して見ると、昼間の砲爆撃でお寺は木端微塵にこわされ、瓦礫の山となっている。幸い大隊長は、若干の新たな傷は負ったものの無事だったので救出することができた。

大隊長を背負って田圃道を走ること四百メートル、早速タンビューの師団渡河点に到り師団参謀に会って、大隊長と当番兵一名の舟便渡河をよくよく依頼し、ようやく肩の荷をおろした。

さあ、これから自分の渡河を考える番である。シッタン河のこちら岸には、日本兵は、患者の一部を残してほとんどいない。二十五日、昼間は川辺の葦の陰にひそんで終日を過ごす。敵の砲爆撃の様子から察するに、敵の歩兵部隊が川の近くまで迫っている模様である。夜になるのを待って、川辺から出てタンビューの集落に入り、手当り次第に家の床の竹をはがして筏材を集める。床の竹は直径が五センチ位、身が薄くてまっすぐで、中の空の部分が大きく浮力が大きい。

約百本ばかり集めて結束して筏を作った。そして川に浮べて装具を積み込んだ。いざ出発しようとしたが、筏がぐるっと廻転して積み込んだ荷物は全部流れてしまった。気をと

り直してまた集落に入り、更に倍ほどの竹を集めて筏を組んだ。今度は、私と私の当番の高島上等兵（淀江町出身）と、軍医の前田中尉（神戸市出身）の三人がこれに乗って、太い竹を二つ割にした櫓で漕いで渡ろうというのである。死にものぐるいで漕いで漕いで漕ぎ抜いた結果、幸運にも河の屈曲部の大渦の外側に乗り入れ、一気に川の向こう岸近くに運び込まれ、九死に一生を得て対岸の土手にたどりつくことができた。

河幅二百メートルのこのシッタンほんの奔流を、二十八軍の全員がほとんど筏によって渡河したのだが、その大部分の者が激流に吞まれて流され、無事に渡河し得た者は半分にも満たなかったという。

渡河を終えて、岸の崖がけをよじ登って見ると、どこの隊の兵かわからないが、こちらを將校と見て、草むらの中から木の陰から集ってくる。彼等は、命からがら渡河したもののこれから先の進路について西も東もわからないからであろう。師団の小舟に托して渡河した大隊長を捜しておよそ五時間、岸から五百メートルばかり離れた草むらの一軒家の中で仮の担架に寝かされているのを発見する。大隊長は、全身に数十この破片を受け、その内の相当数が体内にあると思われるが、一滴の消毒薬、一片の繃帯もなく、ただ食をすすめ急造の担架で行を共にする外に術がない。このころより「破傷風」の初期症状が表われる。意識は明確で、時折、師団の動向、敵状等の報告を求め、担架の上から指示を出される。

顔や態度に少しの苦痛の様子も表わさず、「痛い、苦しい」等の言葉は、戦死のその日までもついで聞くことがなかった。

集まって来た他隊の兵は、師団の進路を教えて先行させ、第三大隊は、配下の兵約三十名で、大隊長およびアマーバ赤痢で動けなくなっていた丸山少尉の二人の担架をかついで、師団の後を追うことにした。シッタンの向こう岸からする敵迫撃砲の射程から、一刻も早く遠ざかりたいと前進を促すも、兵の衰弱ぬかるみの担送のため意の如くならず、途中ニャンピンザの部落で激しい砲撃のためまた多数の死傷者を出す。更に前進の途中で、私と教導学校の同期生であった田中信夫中尉の担架を掌握し同道する。

八月一日、アウンジー部落で土匪の襲撃を受けるもこれを撃退する。同地で丸山少尉戦死、八月二日、インバクリーク岸に到着。川幅およそ二十メートル、増水のため流れ速く担架を渡すことができない。よつて近くの部落に引き返し筏を作ることにする。このとき、田中中尉は「瓦斯瘡」を発症し苦しんでいたが、手榴弾を抱いて自爆して果てる。

大隊長の症状も、このころからいよいよ進行し、手足のけいれんを来たすようになった。三日、筏によってクリーク渡河、ようやくにして目指すシャン山系の山脚に到着する。五日、師団集結地である「東カナゾビン」に到着。師団では最も遅い到着であった。先行していた三大隊の将兵に会い、感まさに無量である。ペグー山系出發以来、連絡の絶えてい

た各中隊の状況を知るに及んで、その莫大^{はく}な犠牲に言葉もなし。

七月二十日夜、ペグーの山を出発して以来、連日連夜の砲爆撃、一面の水を湛^{たた}えた田圃、濁流^{とうりゅう}滔々^{とうとう}の大河。苦心^{きん}惨怛^{さんたん}、莫大^{はく}な犠牲を払い、生命力の限界を越えて、ついに到着したシャン山系。これからは敵からも増水した河川からも解放されるのだ。

八月八日、師団が邁^{まい}第四期作戦に向かつて出発しようとする朝、「大隊長死去」。この春のタンガップにおける開戦以来、常に側近に在^あって補佐し、温情を以て指導していただいた大隊長を失った。

(2) 故郷の夢

体力の限界を越えて、ようやくにして、シッタン平地へ発進する地点である「一七五四高地」(ビルマの表示は、英国流にフイートで表わされるので、日本流に言えば、約六百メートルほどであろうか。)に到着したのは、七月十八日であった。全軍一斉発進の二十日までには、丸二日間もある。さしたる仕事もないまま、空腹をかかえて、兎^うも角眠^{とく}くしてようがない。そして、眠りの中で見る夢は、決まって「ぼたもちを食う夢と、幼いころ家の前の川で遊んだ夢」である。

子どものころ、母がよくぼたもちを作ってくれた。二月の節句、四月のひな祭り、六月



乾季のシッタン平地から見た1754高地

した。

家族そろって、夕飯の膳げんを囲んで、甘いぼたもちを腹一杯食べる。翌日、学校から帰ると昼のおやつに、昨夜の残りのぼたもちを食べる。そして、満ち足りた気持ちになった時、決まって目が覚める。ぼたもちの夢を見ている時は、空腹も、栄養失調も忘れてしあわせ

の節句、八月のお盆はもとより、十月の村祭り、子ども誕生祝いにも。ぼたもちとは、おはぎの田舎言葉である。ぼたもち作りの前日は、五百メートルほど離れた外谷商店へ、餡あんの素とどろどろした砂糖の「しろした」を買いにやらされた。餡の素を水で練って、とろ火で煮ながらしろしたを加えていく。この時餡が焦げないように、しゃもじで絶えずかきまぜなければならぬ。これは子どもの仕事である。餡ができると、餅米を炊いたご飯を丸めて、餡の鍋の中へほうり込み転がして餡をまぶす。できたぼたもちは、「きりだめ」という塗り物の箱の中に隅からきちんと並べられる。手伝いの途中で、餡を指につけてなめてよく叱られる

な気持ちいっぱい時間である。そして目ざめた時は、前にも増して空腹を感じ、また早く眠って、ぼたもちの夢を見たいと思うのである。

ぼたもちや砂糖を食べた夢の続きは、きまって「家の前の川で遊ぶ夢」である。私の家の前には幅が十五メートルほどの浅い小石河原の川が流れている。この川は、春の田植作業のころと、真夏のひでりのころには水が無くなる。水が減って流れが止まると、日がな一日の川遊びが始まる。水溜りの石を除くと、赤い蟹が這い出して来る。そして石の下には、ぼつかがある。時には鯰なますがいることもある。それをバケツに獲って、大きさを比べ合ったり数を自慢したりして遊ぶ。また、川の水を堰止めて、中の水をバケツやそうき（手箕）で替え出して、中の魚をごっそり獲ったりもする。眠る度ごとに飽くことなく川で遊んだ夢を見る。

少年のころ、随分山でも遊び、野原を駆けても遊んだが、不思議とペグーの山で見る夢は、川遊びのそれであった。

(3) 大隊長の負傷

大隊は、ペグー山系を出発するまでは、一応軍としての指揮命令系統を保っていたが、シタン平地におけると同時に、各隊各兵は一斉に離散して、目標のシャン山麓目指して、

われ先にと行動することになった。これは、一面の冠水地帯の故もあり、また執拗な敵の砲爆撃の故でもあるが、とても部隊としてまとまりのある行動などできるはずもないからである。この中で、第三大隊にとつて最も悲劇的であつたのは、シッタン河畔のオピヤ付近において、山根大隊長が、再起不能の全身に負傷を負うというでき事に当面したことである。

オピアの戦闘について、イギリスの軍司令部将校ルイス・アレンが、其の著「シッタン河脱出作戦」の中で次のように述べている。

「日本軍は、別の部隊、山根光雄大尉指揮の一二連隊第三大隊をもつて、オピヤを奪うとした。大隊は、シッタン河西岸の渡河点に向かい、二十二日夕刻オピヤに近づいた。ところがそこには、敵があふれんばかり駐屯していた。彼等は直ちに攻撃をかけた。しかし、村は頑強に抵抗し、奪取はならなかった。二十三日朝、山根大尉は攻撃を断念し、部隊を半マイル南下させ、そこから渡河にかかった。」と。また別の項では、「シッタン西岸のオピヤには、二門の砲を備えた英軍隷下の五〇〇名の兵がいた。」とも記している。

この本では、いとも簡単に「攻撃を断念して、南下した。」と書いているが、わが第三大隊は、この戦闘で決定的といつてもよいほどの損害を被つた。その状況は次のようである。一面に冠水した田圃を、砲撃や飛行機に追われながら、一路シッタン河畔へと急ぐ中で

大隊長が掌握し得た部下は、大隊本部の二十名ばかりと、第十中隊長の掌握する三十名ばかりの兵であつた。七月二十二日午後、渡河点であるオピヤに前進するため、大隊長は、同村の手前千メートル位のところから、冠水した田んぼの前進をやめて、冠水していない唯一の路であるピューからオピヤに通ずる舗装道路上を前進することにした。みんなが、ぬかるみから解放されて、固い道を歩くのは実に何か月ぶりのことであろうか。渡河点を目前にして、固い道路を踏みしめながら前進する我々には、苦勞の末、やっとたどり着いたという安堵感があつた。

と、その時である。先頭の集団が、オピヤの手前二百メートルに達した時、突如として激しい銃声が始つた。オピヤの村の一面から、機関銃、小銃の銃声に交じつて砲撃まで始めてきた。道路に上つて、やっと氣を許した我が隊は、一瞬にして修羅場となつてしまつた。道路の両方の崖にはり付いた我が方は、二進も三進もいなくなつて、何時間もその場にすくんでしまつた。何時間か続いた敵の猛射も夜には一応とまつたので、大隊は、道路沿いの後ろの部落レパンゴンに退ることにした。

このレパンゴンは、戸数が三、四十戸ばかりの農家の集まりで、もちろん住民は避難している無人の部落である。村はオピヤ道とピュー川にはさまれた形で、村の真中には深さが一メートル、幅が二メートル位な溝があつて、溝の両側には柳の木が植えられていた。

山根大隊長は、村の中央の天然の壕になつてゐるこの溝の中で全体の指揮を執つておられた。夜が明けて、朝の視界が開けたころ、私は集落の周りに配置した兵のところを廻つて、各人に防衛の担当区域等を指示して歩いた。そして集落を一周して、大隊長のところに帰つて来て、畑の上に伏せた姿勢で溝の中の大隊長に、その状況を報告していた。溝の中から頭を出して私の報告を聞いている大隊長と、私の頭は、一メートルも離れていない。その時である。突如として、オピアの部落から激しい迫撃砲の一斉射撃が始まつた。集落の中心部にゐる私たちの周りは、次々と砲弾が炸裂し、その破片と共に土の塊があたり一面に飛び散る。二人はどうすることもできないので、ただ頭を地面につけた姿勢で砲撃の止むのを待つしかない。

激しい砲撃の中の一発が、二人の頭上の柳の木に命中して炸裂し、一瞬破片の雨がわれわれの周り一面に降り散つて来た。砲弾の先頭部には、瞬発信管というのが取付けられていて、この信管が何かに当たると瞬時に砲弾は炸裂して、何十何百という鉄の破片になつて周りに飛び散るのである。一しきり砲撃が終つて、私は静かに体を動かして見たが、有り難いことにどこにも異状が無い。そして壕の中の大隊長は、と見ると、背から太股にかけて真赤な血が軍服を染めている。破片を全身に浴びたのだ。すぐに大隊長を民家に担ぎ込んで、軍医を呼んで治療に当らせた。治療と言つても、薬も何も無い。消毒薬すら全々

ない。服をはぎ取り、流れ出た血を雨水で洗い、外から見えている破片を抜きとる位のことしかできない。

戦闘常識として、砲爆撃に対しては壕の中にいる方が、平地に伏せている者に比べて、その何倍も安全性が高いといわれている。大隊長は壕の中にいた。私は平地に伏せていた。それなのに、大隊長は全身に破片創を受けて負傷、私はかすり傷の一つもない。前にも述べたように、戦場における運、不運が人の生死をも左右する。

決死のシツタン渡河を前に、大隊長の指揮を失った痛手と、疲労困憊した兵によつて大隊長を運び通していかねければならない苦悩は、大隊長の補佐役である副官の肩に重くのしかかり、私に課せられた任務と責任はいよいよ大きなものになった。

その日、午後になると、しきりと敵の飛行機がやつて来だした。飛行機は、戦闘機ほどの小型機で、両翼に小型爆弾二発を持っており、超低空で飛来して爆弾を投下しまた旋回して機関銃掃射を反覆する。南の空から二機がやつて来た。その爆音から、この部落が襲われると直感した私は、「敵飛行機、直ちに退避」と怒鳴つておいて、急いで大隊長を背負つて庭先の壕にとび込んだ。その瞬間、爆弾で、先ほどまで居た家が木端微塵に壊されてしまった。危機一発で大隊長は助かったが、本部や配属になっていた隊の兵に多数の死傷者を出した。

二十三日、夜になるのを待つて、オピアからの渡河を断念して、同村の南部で渡河点を捜すことにし、大隊長を背負つて泥田の中を約八百メートルほど南のポンヂビンの寺院に到着した。ここは比較的大きなお寺で、煉瓦づくりの塔や礼拝堂があつた。まさか英軍でも、ビルマの聖域である寺院への攻撃は少しは遠慮するであらうとの希望的な観測もあつたので、大隊長以下の負傷者を寺に入れ、元気な者は五百メートルほどはなれたシツタン河畔に向かつた。

河畔の集落タンビューで、丸木舟によつて渡河準備を進めていた、師団司令部を発見した。早速、師団參謀さんぼうを捜して負傷している大隊長を舟で渡してもらうよう懇願した。その結果、二十五日早晩の師団最後の便で渡してもらうよう話をつけ、これで大隊長の渡河についての重荷を下ろすことができた。その夜は、河岸の葦の中を歩き廻り、配下各中隊との連絡に努めると共に、自分の渡河点の調査に時間を費した。

二十四日の昼間は、相も変わらず敵の砲爆撃が激しいので、終日河岸の葦の中で水につかつて過ごす。このころになると、たいぶ迫撃砲の攻撃にもなれて、その発射音を聞けば、こちらをねらつて撃つたのか、それとも他の方をねらつたのかが、およそわかるようになった。ポン、ポン、ポンと発射音を聞いて「くるぞ、伏せろ」と叫ぶと、皆一斉に水の中に頭を伏せる。数秒もたたぬ間に、果たせる哉一面に炸裂音さくが響く。随分とこれで助かつた。

二十四日夜、大隊長を渡河場のタンビューに運ぶべく、ポンチビンの寺に引き返した。何と驚いたことに、寺の煉瓦造りの礼拝所は、昼間の砲撃で跡方もないよう壊され、あたり一面瓦礫の山になっている。散乱した木材等を取り除きながら「大隊長殿、大隊長殿」と叫びながら捜して歩いた。すると、一方の材木の隙間から「おい」という返事が返って来た。駆け寄って、瓦礫や材木の隙間から大隊長を救出した。さいわいな事に、新しい傷は殆どなく、容態は昨日と余り変わりが無い。しかし、同時に避難させて置いた浅田主計少尉以下の負傷者は、全員死んでしまっていた。

大隊長をおぶって田圃の中を師団司令部の渡河場に行き、当番兵一人を付けて、参謀によくよく渡河の件を依頼して、自分の渡河にとりかかることにした。

(4) シッタンの渡河

乾季には川幅が五十メートル位、所によつては徒歩で渡ることが可能なシッタン河も、折から最盛期となった雨季の雨を集めて、川幅二百メートル位、濁流滔々、矢のように流れている。川上から渡河した者の筏が、あるいは無人のまま、あるいは放心した兵を乗せて流れ去っていく。時には二抱^{かか}えも三抱^{かか}えもあろうかと思われる大木が根こそぎ流れて来る。シッタン河は、屈曲が多いので、曲がり目では、川幅の半分を越えるような大きな渦^{うず}



乾季のシタン河

が巻いている。

ペグーから持ち出した竹筒などは、もはやとうに無くしてしまっている。水泳があまり得意でない私は、どうしてこの河を渡ろうかと思案した。筏を作って、それにつかまって泳いで渡るなどということはとても無理である。幸いに丸木舟漕ぎには多少の自信があつたので、とにかく、大きな筏を作って、それに乗って漕いで渡することに決めた。

夜に入って、敵機も去り砲撃も止んだので、早速付近の民家に入り、手当り次第に床の竹をはぎ取って筏の材料集めをした。私と一緒に渡ろうというのは、前田軍医と高島上等兵である。



乾季のシッタン河

三人はわき目もふらず懸命に床をはいだ。床の竹は、身が薄くて中が大きく、まっ直ぐで長く、筏材^{いかだ}としては最適である。はぎ取った百本ばかりの竹で、一まず筏を作ることにした。用意していた縄で頑丈にくくりつけて水に浮べた。そして、まず持ち合わせた装具を乗せて、次に一人が筏に乗った瞬間、筏はぐるりと一廻転して装具類の一切が流れてしまった。装具類は致し方無いとしても、とてもこれに三人が乗るということはできないので、筏を引き上げて、もっと材料を足しておおきな筏を作ることにした。

三人は、またもとの部落に引き返して、次々と床竹を集めた。夜明け前に

なったころ、ようやく、初めの二倍位の材料が集まったので、筏を組み直した。今度は、三人が乗つても腰のあたりまで沈む程度である。櫂^{かい}は、柱材の太い竹を二つ割りにしたものである。舟漕ぎの経験のある私が、最後尾に乗つて漕ぎながら舵^かを取る。他の二人は漕ぎ手である。舟は、流れに向かつて四十五度上流にむかつて漕ぐと、概ね真横に進むものである。

三人は筏にまたがった姿勢で、漕ぎ出した。死に物狂いで、漕いだ。漕いで、漕いで、漕ぎまくつて、ふと後ろをふり返りると、漕ぎ出した岸辺がすぐそこに見える。流されているだけで、少しも前に進んでいない。岸辺の流れは特に急である。「もつと漕げ、しつかり漕げ」と叫んで、猶も必死で漕いだ。

すると、幸運、まことに幸運にも、川の屈曲部に差しかかり、左廻りの大渦^{うず}の外側に乗り入れたらしく、筏が、ひとりでに、川幅の三分の二くらいを一氣に対岸の方へ送り込まれた。しかし、後の三分の一位は特に流れが速い。「それ、もう少しだ、頑張れ、頑張れ」と腕も折れんばかりに漕いで、先頭の者がかううじて岸の葦をつかむことができた。まさに「九死に一生」である。

兵の帯剣を使つて、二メートルほどの崖に足場を掘つて対岸によじ登った。三人は、その場にへたり込んで、いま渡り切った闇の中の急流を見つめながら声も出なかった。七月

二十六日、夜明け前である。

今日は、恐らく昨夜までいた向こう岸には、敵が進出して来るであろう。私たちは、同行した師団主力の中では、最後に渡河したことになる。運命の神に見放されることなく、莫大な戦友の命を奪ったこの河も無事渡らしていただいた。「天佑神助^{あづか}」とはこんな時に使う言葉であろう。

先述したルイス・アレンは、その著書の中で、私たちの五十四師団のこの渡河作戦について次のように記している。

「五十四師団のシッタン平地出撃以前の兵力九、三〇〇名が、この作戦終了時には三、一九名になった。」と。損耗は、実に全兵力の三分の二に相当する。即ち、無事に渡河し得た者は三人に一人ということになる。シッタン河の河口を警備していた部隊によると、二十八軍の三万人がシッタン河を渡ったとき、河に流されて死んだ兵の屍が三日三晩流れつづいたという。

(5) 大隊長の戦死

二十六日の昼、私が渡河した地点から五百メートルほど離れたカイングヤ部落の近くの小屋の中で、仮造の担架の上で寝ていた大隊長を発見する。そして我が第三大隊の兵も十

数名を掌握、その中にひどい下痢で自分では動けなくなっていた大隊本部付きの丸山少尉もいた。ここまで来ると、敵の砲の射程内で、時折、部落を目標にしためくら射ちはあるものの、敵の戦車や歩兵の攻撃を受ける心配はなく、必要以外は部落に近づかないようにすること、昼間の飛行機の攻撃に注意さえすれば安心である。兵に指示して糲を集めて炊飯させ、久方振りにゆっくり食事をとった。

さて、これからがまた大変である。もう師団主力はとつくに東のシャン山系目指して出発している。大隊長と丸山少尉の二つの担架を担ぎながら、師団に追及しなけねばならない。一つの担架を担ぐのに、最低八人の兵が必要である。すなわち、一回に四人で担いで二交替する。担架を二つ担ぐには十六人が必要である。ところが、どの兵も体力消耗の極限状態にあり、担架どころか、我が身を引きづって歩くのが精一杯である。兵には気の毒な気もするが、叱りつけ怒鳴りつけて担架を担がせて行く。私の頭の中に焼付けられている地図をたよりとして、のろのろの前進である。

七月三十一日、アウンジーの部落に到着、ようやく敵の砲弾もとどかなくなり安堵するも、このころになり、担送を嫌がる兵が故意に隊列から落伍したりして、二つの担架輸送が不可能になってきた。しかも、担架上の患者は、薬品がある訳でなし、休養の施設がある訳でもなし、ましてこの状況下では、休養の時間もとれない。この日、部落はずれのク

リークの向こうから、土匪軍の襲撃を受けた。兵等にはもう戦う気力も失せて、ただ床の上で長くなっているばかりなので、私と当番兵は兵の小銃を借りて、部落に通ずる橋のたもとでこれと応戦し、幸いに撃退することができた。

もう万事休すである。成るべく早く師団主力に追いつかなければならない。が、担架二つを持つては、進むに進めないのである。私は意を決して、もう自力では立ち上れないほどに衰弱している丸山少尉と話し合うことにした。

丸山少尉は、終にここで壮烈な戦死を遂げた。タンガップの開戦以来、大隊本部の将校として、共に助け合い補い合つて戦闘を続けて来た。そして剛毅で人柄のよかつた彼を失わなければならなくなつたことは、遺憾の極みである。

大隊長は、このころから手足の先にけいれんが始めて、破傷風の症状が顕著になつて来た。消毒するにも薬はなく、ましてワクチン等あろうはずがない。軍医は「けいれんは、心臓に遠い方から始めて、だんだん心臓に近づいて起こるようになります。後一週間位でしょう。」という。どうしてあげることもできない。ただ、励まし元氣付けながら、担架を担いで前進するのみである。

八月二日、シャン高地と、シツタン平地の境界を為す「インバクリーク」に差ししかつた。ここを越えれば、長かつた泥濘の低湿地帯とはお別れで、うっそうと茂つた樹林地帯

に入る。長い間なやまされ続けた飛行機ともお別れである。ところが河岸に到着してみると川は意外と大きく、川幅も二、三十メートルはあり、流れものすごく速い。このままでは担架を渡すこともできないので、また筏を組んで渡ることにして、近くの部落まで後がえりをするに決めた。筏は、バナナの茎を五六本並べて台とし、その上に例の如く家を壊した竹を並べてその上に担架をくくりつけた。そして全員が筏のまわりにつかまって泳ぎ渡り、無事渡河を完了した。

この渡河地で、また痛ましいでき事があつた。それは、担架で運ばれて来た私の大隊の作業隊長である田中信夫中尉が、手榴弾を胸に抱いて自爆して果てたことである。彼は、私と豊橋の教導学校の同期生で、三大隊では唯一の同期であつた。シタン河畔の戦闘で顔面に破片創を受け、それがもとで瓦斯^{ガス}壊疽^{壊疽}に罹^{かか}り、兵等に担がれて追及して来たものである。この戦況の中で、治療、治癒の見込みもなく、これ以上兵に世話をかけたくないと思つたからであらうか。彼は鳥取市出身で、成績も優秀、剛胆な男であつた。

インバクリークを越えると、後は、茂った樹の下を八キロばかり東へ行けば、師団の集結地である「カナゾビン」に到着する。私は隊の先頭を、道をさぐりながら進んでいると、担架上の大隊長から、久方振りに声がかかった。

「おい、どの方角へ進んでいるのか。」

「東です。もうすぐカナゾビンです。」

「ちがう。これは南へ向かっている。太陽の方角へ歩いている。」

言われて太陽を見ると、昼前の今、確かに太陽の方向すなわち南へ向かっていることになる。早速、進路を東に変えたのであるが、これが大隊長から直接に「指揮」を受けた最後になった。

八月五日、ようやくカナゾビンの集結地に到着、直ちに師団司令部に第三大隊到着の旨を報告し、併せて兵員兵器の損耗状況を報告した。邁作戦もその山場を越えて、ここに集結し得た者は大隊兵力の三分の一にも満たない。ようやく到着した兵も着のみ着ままのおんぼろの衣服をまとい、しかも体力を消耗し尽した乞食の集団である。何とも苛烈な戦闘行動であった。久方振りに敵の攻撃を心配することなく、友軍の中で安らかな気持ちで休息することができた。まさに天国である。

このころから、大隊長の破傷風の症状が進行し、顔面もけいれんを起し、更には舌もまひし、お粥ものを通らなくなってきた。師団の軍医部へ出掛けて、何か薬はないか、何か処置する術はないか聞いてまわったが、もちろん、処置の方法等あろうはずもなかった。ただ副官以下、軍医本部員が枕頭にあって、元氣を出すよう激励するのが精一ぱいであった。

八月八日は、全員が一斉に第四期作戦の行動を起す日であるが、山根大隊長は、その日



午前五時ころ、ついに心臓のけいれんを最後に息絶えた。

陸軍歩兵少佐山根光雄。年令は確か私と同じ二十五才。鳥取市三山口の出身で、鳥取中学から陸軍士官学校に進んだ駿材である。わが百二十一連隊創立時は、選ばれて連隊旗手となり、本次戦争では、第一中隊長から後に第三大隊長に栄進、タンガップ戦の初めから大隊長として戦闘指揮をとった。

私も、戦闘初期に第三大隊副官に任ぜられ、直接山根大隊長の輔佐として仕えて来たが、この間、どのような苦境に立つても一度も弱音を聞いた事が無い。また部下を叱責した事はただの一回もなく、常に沈着、冷静、温厚であり続けた。優秀な大隊長であつた。

八日朝、夜明けと同時に、降りしきる雨の中大隊の全員が部落の裏の椰子林に整列し、頭を東方に向けて葬られる大隊長に、全員敬礼を以て送葬した。当日は、部隊出発の日で時間もとれないので、右手の親指を外して荼毘^{だび}に付し遺骨とした。遺骨は、擲弾筒の砲弾の信管入れ（アルミニウム）に入れて、私が肌身離さず携行、復員後、鳥取市の遺宅を訪れ故人のお母さんに手渡した。本ビルマ戦中、遺骨が帰るといった事は異例のことである。

十一、極限の邁第四期作戰と敗戦

(1) 炭の粉を薬として

八月八日、師団は南方二百キロにあるピリンに向け、カナゾピンを出発した。第三大隊は、山根大隊長の戦死により、第九中隊長の坂上中尉を大隊長代理として師団の直轄となり、師団司令部に続行することになった。(第十中隊長中村中尉および第十一中隊長の水島中尉は、シッタン河で流れて生死不明) 相変わらずの雨季の最中で、連日連夜豪雨が降り続く。道は比較的硬く、樹林の中の細道を登り下りしながら進む。ペグー山系に比べれば比較的楽な行軍である。さらにこの山系には、若干の土民軍を除いては敵も無く、また樹木に遮られて空からも発見されることなく、敵の攻撃を心配することはない。

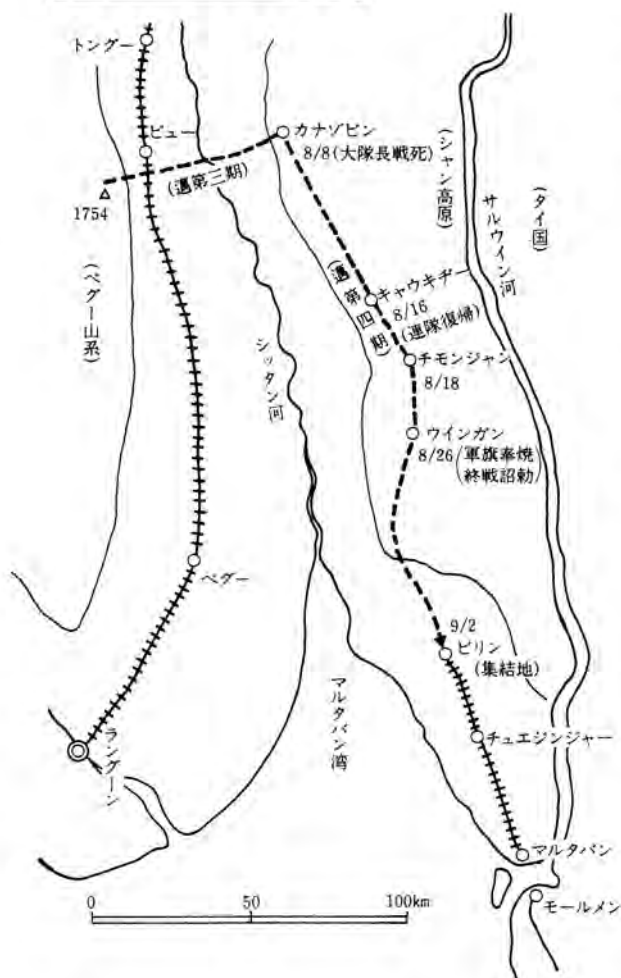
しかし、兵隊の窮状は、従来に比して一層深刻になって来た。第一に、まともな服装をした者がない。帽子をかむっている者は稀である。大部分が無帽か、布を裂いて作った鉢巻きをしている。靴を履いている者は皆無に近い。服も着のみ着まま、それが破れればやぶれ放題、折からの雨と汗で体中は虱のわき放題、荷物を布に巻いて背負ったり、飯盒や最小限の持物を腰につるしたり、全く乞食部隊の行進である。それに栄養失調は一層ひど

くなり、更にアメーバー赤痢やマラリアの発病があり、まともな者は一人もいないといった状況である。

私は、大隊長の遺骨を信管入れの小さな管に入れ、布で巻いて首に掛け、常に大隊の先頭を歩いた。これは、大隊長なき後、大隊を指揮引率する責任と、一面では衰弱した我が身を自ら鞭打つためでもある。出発して間もなく、同行の山田軍医が歩きながらうわ言を言うようになった。内容は専ら医学の講義である。初めのうちは、声を掛けたり体をゆすったりして注意してやったが、歩き出すと必ずといっていいほどしゃべり出すので、こちらも根負けしてそのままにして歩かせた。彼は夢現うつつの中でうわ言を言いながら、ただ反射的に足を交互に運んでいるだけである。

カナゾビンから出発して二日目位から、私は下痢症にかかり難儀をした。日に五、六回の排便、それも完全な下痢である。栄養失調で弱った体に下痢が加わって、体は一層衰弱していく。いくら下痢をしているからと言っても、食事をとらないという訳にはいかない。食事といっても例の如く、玄米を炊いたのに塩をふりかけて食うだけである。もちろん薬などは更にないので、炊事をした所では、食後に焚きさしの竹炭を粉にして、それを掌てのひら一ぱい位ずつ食べて薬の代わりとした。軍の行動であるので、行軍は一日たりとも休むわけにはいかない。もしこのまま下痢が止まらなければ、結果は行き倒れに決まっている。

邁第四期作戰図



三日経つても、四日経つても下痢は止まらない。

処置に困った私は、朝食のときの炭の粉を両のポケット一杯につめて、歩きながら絶えず食べることにした。炭の粉は、口の中でもさきとして食べられたものではない。そこで、口いっぱいにつめ込んで、少量の水で一気に流し込む。数日経ったある日、突然おな

らが一発出た。「やった、下痢が直った。これで下痢の厄病神ともお別れだ。」嬉しかった。若干の体力を残して、死に神が退散してくれたのである。この時もまた、幸運の神に救われた。

八月十六日、キャウキジー到着、ここでシッタンの河の下流を渡っておよそ半月も待機していた、私たちの百二十一連隊の主力に出会った。師団命令により、師団直轄の任務を解かれ、連隊に復帰することになった。思えば、四月末、われわれ第三大隊を残して、先に転進を開始した連隊主力と別れて四か月ぶりの事である。嬉しかった。これでやっと我が家に帰ったような気持ちである。早速、連隊長を尋ねて復帰の申告をすると共に、大隊長の戦死を始め、数々の苦戦死闘の状況を報告した。そして、その足で第一大隊副官の油井恭中尉の宿舎をたずねた。油井中尉は隠岐の出身で、中国での初等兵の時から戦友であり、豊橋教導学校の同期生でもある。

「よう生きていたな。何だ、その乞食のような格好は。」口は悪いが、戦友として情がこもった言葉である。同郷人は有り難い、同期生は有り難い。二月からこの方、戦闘に次ぐ戦闘で、人の情けなどは微塵もない世界で過ごして来た半年であった。任務の遂行、叱咤激励に明け暮れた半歳であった。

早速、彼は当番兵に命じて、ドラム缶の風呂に湯をわかしてくれた。

「おい、しゃがんでおれ、おれが背中を流してやる。」お湯が、頭から背中に流れる。何と、お湯とはこんなにも温かいものであつたのか。肌の温かさは、忽ち心たちまの温かさに連なつて、涙が流れてきてしやうがない。友の心の温かさ、お湯の温かさ、次から次と涙が溢れて止まらない。思えば、お湯を使うことは、正月以来初めてである。乾季は専ら壕の中で過し、雨季に入つてからは毎日禪まで濡れての行軍であつた。

(2) 敗戦の報

八月二十一日、敵飛行機から投下した伝單（宣伝ビラ）に「日本無条件降伏」とあつたが、一笑に付してなおも行軍を続ける。二十三日、初めて友軍の警備地区に入り、たばこ、味噌、米の補給を受ける。たばこは、今年の正月以来初めてお目にかかつた。味噌に至つては、恐らくビルマ上陸以来初のご馳走ちそうである。やつとここまで来て、八か月に及ぶ戦闘が終つたのである。

ここで伝えられたのが、「日本の敗戦」であつた。生を享けてこのかた二十数年、日本が敗れる等ということは、ついぞ思つても見たことがない。敗戦といつても具体的に日本がどのようなのか、今の私たちがどうなるのか想像もつかない。艱難辛苦かんなんしんく、やつと敵中を突破して友軍陣地内にたどり着いたというのに。日本が全面において劣勢であること

はわかつていた。特に我々のビルマ戦線では、完膚^{かんぷ}なきまでにたたかれたことはわかつていた。しかし、これから態勢を立て直しての戦闘を信じてここまで来たのに、敗戦とは何たることであるか。

敗戦のしらせが伝わっても行軍は続いた。命令が変わらない限り、昨日も今日も、そして明日もビルマに向って休みない行進が続く。敗戦を深く考えたり、その感傷にふける余裕はない。弱り切った体に鞭うってただ歩くのみである。

八月二十六日、ウインガンにおいて、「軍旗を焼却奉還するから将校は全員集合せよ」との命令があつた。軍旗というのは、明治の建軍以来、連隊が創設されるごとにその象徴として天皇から直接下附され、連隊統帥^{とうし}の要^{かなめ}として、連隊の存する限り連綿と伝わるものである。軍旗を焼却するということは、連隊を解散するということに外ならない。

連隊長をはじめ連隊の幹部には何か悲壮感が感じられたが、衰弱の果て、長い時間直立していることさえ難儀な私にとっては、「とうとう、そういうことになってしまったのか」といった程度の思いしか感じられなくなっていた。とにかく、負けたのだ。しかし、勝ち負けより、戦闘が終結したことのほうが、今の自分にとっては重要である。これで、真昼間でも大空の下を、大手を振って歩ける喜びの方が大きい。敗戦について、来し方行く末を案ずることよりも、半死半生の身にとっては、現実の状況の変化のほうが嬉しいのである。

(3) 体力の限界

このころから、体の衰弱は一層ひどくなり、ついには独りでは立ち上がれなくなつてしまった。四十五分歩いて十五分の休憩、いざ出発となると、「すまんが、手を引っぱつてくれ」と兵隊に手を引いて立たせてもらう。立ち上がると足が自然に交互に動く。次の足を踏み出す所を見つめながら、ただ歩くだけである。周りに何かあつて、ぎよろつと眼玉を動かして視線を移すと、五六歩あるくエネルギーを損したような氣になる。四十五分歩いて、「休憩」の合図を出すと同時に、道端にどたつと体を投げ出すようにして座つてしまう。休憩中、体を土の上に横たえて、いざ出発となると、「おい、頼む」といつて手を引いて立たせてもらつては歩き出す。何としても齒をくいしばつて、集結地点までは大隊を引率しなければならぬ。責任感というか、意地というか、ふらふらしながらの行進である。

このようにしておよそ一週間、ようやくの思いで、九月二日に集結地であるピリンに着した。今思い返して見ても、よくぞ頑張つたもの、よくぞ体がもつたものと不思議にさえ思える。衰弱と目的地到着の安堵感、それに敗戦の虚脱感も加わつて、ピリンでは体を投げ出したままでも動くこともできなかった。

終戦がもう一月遅れていたら、集結地がもう少し遠かったら、多分行き倒れの仲間に入っ
て、生きていることはあるまい。気力、体力のギリギリの限界点に集結地があったこと、
これも、私に与えられた「運のよさ」に外ならない。

ビリンで被服や食料の支給を受け、二時間ばかりの列車輸送によって、終戦後の大隊の
待機地であるシュエジンジャーに到着、ここで約十日間の休養をすることになった。ここ
では、板敷きの民家を借りて入ることになったが、屋根のある家に入るのは、正月以来八
か月ぶりの事である。

ここでも、床板の上に体を投げ出したままで、どうにも動けない。動くのは僅かに食事
の時体を起すのと、便所へ行く程度である。到着して数日後、当番兵が虱だらけの古い服
を煮沸してくれた。煮沸が終って衣類を持った来てくれたが、これを両手でねじって絞る
だけの力が無い。致し方がないので、それを床板の上に置いて坐ったままで、両方の膝ば
うずで交互に押さえつけ、水を切って干してもらったほどである。